

## 第五章 追 想 編

本章では、歴代職員、専門家から寄せられた追想文を在勤年次の古い順に掲載した。

この追想文が、本小史での欠落部分を補い、当農協誌におけるエピソードを紹介出来る筈である。

# THE UNIVERSITY OF CHICAGO

THE UNIVERSITY OF CHICAGO  
1100 EAST 58TH STREET  
CHICAGO, ILLINOIS 60637  
TEL: 773-707-3000  
WWW.CHICAGO.EDU

# “パ農総試勤務時代の思い出”

元職員 菊池 明 男

私は、国道7号線のストロエスネル市までの舗装工事が盛んに行われていた昭和39年/2月初旬に、イグアス指導農場に就職した（ブラジルに渡るには、フランク港から船を利用していた頃である）。

指導農場では、伐開間もない大木の切株が散在する試験ホ場の造成期にあつた。以後、パ農総試本場として主要施設が整備され、業務体制も業務課、研究室が設置されて間もない50年7月まで10年以上勤務したことになる。

試験場収納庫を借りて結婚式を挙げ、一男二女の子供が試験場産という財産が残つた。

現在の、私の全財産の大部分を占めているものである。それだけに、試験場には非常な愛着を感じており今でも訪問の折には、実家に帰省するような喜びに浸る。

ホ場の中央にあるパラナ松並木は、試験場の歴史を年輪に刻み、今や日系移住地のみならず、パ国の農業分野に多大な貢献をしている試験場の進展振りを映すが如く、美事な成長を見せているが、幼木期には水をやり、アリ退治に苦勞したことが、ついこの間の如く思い出される。

生活面では、特に井戸の深い所で、20m以上もあり、ポンプは不思議なほど故障することが多く、その都度、井戸に宙吊りになつて修理するが、断水することが暫々あつたし、発電機も故障している時の方が多く、ランプ生活が続いて、家族を持つ職員は大変苦勞が多かつた。

最後に、25年経過した試験場の発展振りを見る事の出来ない、専門の人工授精の技術を本格的に活かす前に、不幸にも交通事故死した蓬田さん、仕事の合間にステビア栽培試験を熱心に手伝っていただいた丹治先生（岩手県にて病没）、畜産センター開設に、共に仕事をし、退職後若くして亡くなつた小林さんに対し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

在勤期間 1964年/2月-1975年7月

# “ 思 い 出 ”

元職員 小 菅 伊之彦

光陰矢の如し、御地を去つてから既に20年、御地在勤時代が懐かしく思い出されます。

私は、1966年9月から1968年4月まで在勤いたしました。当時、私は農場に席を置きながら、入植者の営農・生活の安定と発展を効率的に図る為には、業務的に融資・援護・営農が一体となる必要があるとの方針に基づき、命により事業所に勤務し、営農関係を担当しておりました。従つて、直接的には農場運営にはタッチしておりませんでした。それでも赴任の初期には、国道沿いの並木、旧事務所周辺のユーカーリ、パラナ松等を手植えた記憶があります。

サンパウロ在勤中の1983年6月に訪ねた時、大きく成長しているのを眺め、感慨無量のものがありました。この他、農業講習会を二回開講し、次代を担う青年に対し、栽培、農業経営、病虫害防除等を講義し、また、夕食を共にしながら人生論を語つたことなどが記憶にあります。これら青年は、現在移住地の中心として活躍されていることでしょう。お会いしたいものです。

ブラグアイは、私にとって一度は永住を志した国であり、体力的にも精神的にも無理がきき、知識欲旺盛で、向上心があり、何でも挑戦（経験）してやろうとの意欲の強い20才代後半から30才代の7年間を過ごした国であります。特に御地は、私が新婚生活を送つたところであり、長男を授かつた地であります。

このように、わが家族にとっては忘れ得ぬ地・心の故郷としている地であります。当時住んでいた家は、

現在でも人夫小屋として現存しているようですが、一部レンガ造りの電車の如く細長い家で、自分なりに、“埋漏れ木舎”と呼んでいました。雨もり、襲撃アリなど今でも思い出しますが、移住地の人達に家族ぐるみで親しく付き合っていたとき、また仕事の面でも、良き上司・同僚・移住地の人達に恵まれ、充実感があり、楽しく過ごさせてもらったものです。

思い出は尽きない。移住地のこと、仕事のことなどを書くべきところ、個人的なことを中心に思い出の一端を書き綴りました。

最後になりましたが、試験場の益々の発展、充実と、場長はじめ皆様の健康とご繁栄をお祈り申し上げます。  
在勤期間 1966年9月 - 1968年4月

## “養蚕の思い出”

元職員 石橋 隆 介

パ農総試がどうい理由で設立されたか、忘れてもらっては困るので、初代(と言つても結果的に一代限りに終つてしまつたが)の養蚕担当職員としての責務上、一筆投稿することゝしたい。

昭和47年度予算に、従来の畜産を主体としたイグアス試験場の機能に、新たに養蚕の試験研究機能を付与するというこで、イグアス試験農場の組織を発展的に改組し、ブラグアイ農業総合試験場を設立することが認められた。この予算獲得に大きく貢献されたのが、アルト・パナ試験農場長時代にブラジルから、トラック一杯の桑苗を“密輸”された逸話の持ち主である“熱血漢”宮下信夫氏である(現在、同氏はプロジェクト・コーディネイターとしてバングラデシュに在勤中)。

私は昭和47年12月、パ農総試設立に伴い、定員増として認められた初代の養蚕担当職員として、パ農総試に赴任した。赴任前の三ヶ月間、群馬県蚕業試験場に技術研修生としてお世話になり、当時の場長から何かあつたら遠慮なくいつてきてほしいとの温かい声援を受けての赴任であつた。

当時のパ農総試の看板は、スペイン語では「畜産と養蚕の試験場」と書かれていた。南部ブラグアイのコロニアの新産業として着実な発展を遂げていた養蚕は、製糸工場建設に必要な500トンの繭の生産を達成する目標に向かつて、増産運動に拍車がかかり、乾繭工場から700 Km(編集部注:現在は国道6号線の開通により190 Kmに短縮)離れたイグアス移住地においても養蚕の導入熱は高かつた。イグアスの養蚕は、導入後の歴史が浅いこともあつて病気の発生が少なく、箱当り30 kg以上の生マユを上げる優良農家がたくさんいた。当時、南部ブラグアイ地区では、既に病気の問題が大きく取り上げられており、この面で新設のパ農総試にかかる期待は大きかつた。パ農総試の桑園整備がようやく一段落した頃、あの悪魔のような“オイル・ショック”の嵐がブラグアイまで吹き荒れ、零細な基盤の上に成り立っていたコロニアの養蚕を直撃した。マユ価は大きく暴落、資材は高騰するので、農家の生産意欲は急速に冷えていつた。期待を集めて新設されたパ農総試の養蚕部門も、その頃から徐々に試験場の“お荷物的存在”となり始め、今、全く消え去つている。

昭和58年2月、ブラジル在勤中の私は、家族と共に休暇でパ農総試を訪問した。家内にとっては10年振り、子供達にとっては初めての訪問であつたが、シスター・山田と思い出話を語り合つていた家内が、帰りがわ泣いていたのが今も強く心に残つている。きつと、新婚当時、二人で蚕の数を数えた(調頭という)、あの懐かしい日々がよみがえつたのにちがいない。

在勤期間 1972年12月 - 1973年7月

## “ 雑 感 ”

元研究室長 瀬 合 義 之

パラグアイ農総試には二度の勤務で、延6年勤めたことになる。多くの面で日本とは対照的な国だった。広々とした耕地、ゆつたりとした生活、日本にはない解放感のような一種の安らぎがあった。車の前を悠然と横切る牛や豚などを見るにつけ、仕事柄、これらの家畜の日本で生活ぶりの気の毒な様子が頭に浮かぶ。身動きもならぬ畜舎での生活など。俗に「アニマルマシーン」と呼ばれ、生物が機械のように扱われる昨今、利益追求のあまり、「もの」の本質まで変えられてしまうのではないかと、いささか危惧もする。

試験場にあつては、移住地の農業は、また畜産はいかにと、日頃意気込んで考えもしたが、所詮、己の力量ではどうにもならない。パラグアイでの農業は特に難しい。農作物の質や量の改善を図るには、人、物など相応の総合力が必要である。また仮に、改善されたとしても、経費高で収益が減つても困る。花が咲くにもやはり「時」が必要なのである。

在勤期間 1975年4月 - 1979年6月

1983年4月 - 1985年4月

## “ 高 師 小 僧 ”

元場長 寺 神 戸 暁

現在、ペルーのリマに住んでいる私は、パラグアイ農業総合試験場の水を、ときどき懐かしく思い出す。リマの水道の水はわるく、もちろん煮沸して飲むのだが、それでも処理の関係で、人体への影響が云々される。

あの、パ農総試の水はどこからくるのか――

1978年、日本のカビの研究者が試験場を訪れ、その細菌集めに協力して私達が原生林を案内することになった。この時選ばれたのが、試験場用水の水源があると言われている南西部地続きの森林である。

原生林の中は、意外なほど起伏に富んでおり、私達は斜面を縫って水平に進んだり、ガケをすべりおろしたりした。植生も様々に変化する。

菌採集の作業に従った緩やかな歩みで後5-1時間位たつた頃、細い川を発見した。あたりの樹はかなりの高さで、樹冠が重なり合っており、地面もしつとり湿つた感じである。この川に沿って逆上ると、ほどなく川は急にその幅をせばめ、私達はあつけなくその水源をつきとめることになった。

水が湧出している場所の上は、草が生い茂る急傾斜のガケとなつて、さらに上方へと向かっている。

「土管がある！」と、湧水口で手を洗っていた同行者の一人が叫んだ。

行つて見ると、土管の背らしき丸い物の一部が見える。触るとザラザラと粗い感じで、こちらに向かつて水平に横たわつている筒の根元は、ガケ下の土中に深く入っている。筒先の部分は、やゝすぼまつた形で、水はそこから噴き出しているのだ。

こんな所に誰が土管を埋めたのだらう――誰だ、彼だ、なんだかんだといつているうちに、その土管のような物は取り出されてしまった。

中央部がやゝふくらんだ円筒状、長さ約40cm 直径1.5cm、なかは空洞となつていて、そこを水が通つていたのである。手にとつて見ると、思いがけず重い。当時、試験場に寝泊まりしていた高知大学の

塩満教授が、この時同行しており、これが“高師小僧”(たかしこぞう)というものと教えられた。地下水に溶けている鉄分が土中で植物の根のまわりを包んで析出していく、根を芯とした管状のものとなる。しまいには、もとの植物の根は枯死してしまう。生成された管は、主に水酸化鉄というから、土管というより、むしろ鉄管といった方がよいかもしれない。

わいわい騒ぎながら、この不思議な土管を試験場まで持つてきてしまつたのだが、私は夕暮れ近くなつて何となく不安な気分におそわれた。そこで一人の同僚と共に、水源現場へ急行した。そして持参した日本酒と塩をふりまき、心なき俗人の好奇の所業によつて、水の湧き口である筒を持ち去つたことについて許しを乞うた。森の精、水の精に――。

あの深い森の中で、こんこんと水を噴き出させていた高師小僧は、今もバ農総試に保存されているだろうか。水源地付近の様子は昔のままであろうか。

雨のないペルーの、砂漠地帯で日を送つている私は、いま、イグアスの水に思いを馳せる。

在勤期間 1976年7月-1979年7月

## “私のパラグアイ農総試”

元研究室職員 有賀秀夫

赤土の大地と緑に包まれたパラグアイ国のイグアス移住地。私は、その移住地内にあるパラグアイ農総試に昭和52年7月から4年間勤務した。

イグアス移住地は、私にとって初めての在外勤務地であり、また、長女が生まれ育つた地でもあり、悲喜こももとの貴重な体験を得た地である。

その移住地を、アルゼンティンから6年振りで家族と共に訪問した。私にとって嬉しかつたことは、当時に比べ、移住地が非常に明るくなつていたこと。また、パラグアイ農総試においては、職員および派遣専門家が増員され、それに伴つて大豆、小麦、野菜、土壌肥料、畜産に関する試験研究並びに営農普及活動等の諸業務がさらに充実・強化され「総合試験場」の名に相応しい機能を発揮していることであつた。

私が在勤した当時のパラグアイ農総試は、養蚕と畜産関係の業務が主体であり、それら業務を専門家を中心として実施していた。その業務体制の中で、私は畑作関係を担当し、試行錯誤を繰り返しながら、大豆等の試験研究を実施していた。

その後、佐々木畑作専門家が派遣され、パラグアイ農総試の畑作関係は佐々木専門家と共に本格的に進展することゝなつたが、その間、私は試験研究計画並びに分析手法等を同専門家にご指導いたゞき、貴重な体験を得る事ができた。

現在私は、アルゼンティン園芸総合試験場(略称:アルゼンティン園芸総試)に勤務している。アルゼンティン園芸総試では、果樹部門が新設されると共に、ブエノス・アイレス市から西北約140 Kmの地点にあるバラデロ移住地に11種類、約1,500本の果樹を本邦より導入し、果樹試験ホ場を新たに建設している。

このように、一つのホ場を新たに建設するという機会には、なかなか巡り合えるものではないが、私は幸にして、当初よりその業務に携わることができた。

この数少ない業務の遂行に当つて、パラグアイ農総試で得た貴重な体験は、いかに有効であつたことか―私にとって、忘れられないパラグアイ農総試ではある。

在勤期間 1977年7月-1981年7月

# “イグアスを想う”

元研究室長心得 江口 義弘

私は、イグアスでは初めての野菜技術者として、多くの新しい研究を手掛けたし、又、現場での活発な技術指導を展開したと、今でも自負している。技術指導の成果は、後日、農家の評価を俟つとしても、私の転任により立消えた数々の野菜の研究を惜しむ気持ちは今も変わらない。1) アルゼンティン市場への青果と種子の輸出を狙ったサバリート(肉詰料理用の小型カボチャ) F1 品種の育成 2) 日本の極早生日長不感応品種を片親とした時無極早生大豆品種の育成 3) 貝塚極早生またはパーミューダーオニオンを元にした玉ねぎ極早生品種の育成(トマトやメロンの裏作として導入し、ゆくゆくは国内自給を指向した) 4) 秋植栽培に適するジャガイモ実生系統の選抜と栽培方法の研究(前記3と同じねらい) 5) 在来種をベースにピーマンの病害抵抗性系統の選抜と育種であった。何れも小規模な予備試験としてスタートさせた。

農業後継者育成の為に、イグアス日語農業高校で毎週欠かさず講義した。彼等が将来、遭遇するであろう農業経営上の雑事を解決し得る能力をつけるべく全力を注いだ。

また一方、農協青年部にも講習や機関誌への投稿を通じて積極的に協力した。北海道の野菜製糖工場における技術指導と原料管理、タイ国東北部における砂糖キビの直営農場の運営、スマトラ南部でのトウモロコシ大規模生産農場設立計画等で経験した農業技術と農業経営を論じ、当地のテラロンシアの長所と短所、農場の損益計算、借入金の複利計算等にも触れた。これら青年達に、いくらかでも未来を考える力と、ブラグアイ人達にリーダーとして尊敬されるに足る知識と技術を身につけさせればとの気持ちが、この動機であった。

ブラグアイの持つ地理的、経済的制約のなかで、日系人が尊敬され、末永くこの地に発展的に根を下ろすことが出来るようにするには、どうしたら良いかを私は真剣に考え求めた。農業の研究と研修を行う汎南米国際農業研修センターを、南米のはた中央下部にあり、殆んど重要な作物が栽培可能なこの地に設立できないのか? これは単に社会的地位のみならず、技術的にも経済的にも日系人に大きく裨益するであろう。

壮年期の三カ年、真摯な情熱を燃やして過したイグアスは、私にとって決して忘れられない土地であり、人達である。親しい方達との交通も絶えていない。愛すべきブラグアイ国の地域開発のモデルとして、立派な発展を遂げるよう、祈念して止まない。

在勤期間 1978年~1982年6月

## “サンパウロ支部からパ農総試へ”

元場長 宮川 清忠

4年間に亘るブラジル勤務の後、ブラグアイ農業総合試験場長の命を受け、サンパウロからブラグアイに転勤した。昭和54年6月のことである。ブラグアイは二度目の勤務であるから、国、移住地事情は自分なりにわかっているとは思っていたが、第一回目の勤務から、日本、ブラジル、ボリビアを経験し、再び3年振りにブラグアイの土を踏んだ時、感あたたかしたことがあり、それが私の場運営の基本的な考え方の一つもなつた。

まずブラグアイでは、いやが応でもブラジル、アルゼンティンの経済的影響を受けること。従つて、移住地の農協は、これら諸国とのコンタクトを持ち、常時、情報を収集する機能を整えておく事が肝要である事。

次に、移住地営農は地域の農業関係にインボルゴされているわけであるから、相手国農政との関りは、不可欠であるので、政府機関との提携を保つていく事。その為には、既に実施されてきている農牧省との協調を、より強化すること。

最後に職員の技術量の問題である。JICAの試験場は、邦人移住者の営農の安定、技術の開発に資することを主な義務とするから、市場、相手国の農政、技術開発、経営マインド等広範にわたり、諸々の情報をキャッチしておくことが必要である。

そのような中で、JICA職員の技術研鑽は、どう行いべきか。

結局、既に実施されていた専門家受入れの拡充であつた。

最近のバ農総試の状況を資料等で読み、これらの点が推進改善されていることを知るとき、心から感謝すると共に、試験場は今後共、大きな視野で発展してゆくことを切に望んでいる。

在勤期間 1979年6月-1981年4月

## “畑作の門を叩いて”

元畑作専門家 佐々木 正 剛

1979年10月下旬のある夕刻、私は期待と不安を抱きながら、イグアスの地に第一歩を印した。バ農総試は、それまで養蚕と畜産を主体としてきたが、養蚕の一段落を機に、畑作（雑作と言われていたが）に転換することになり、畑作専門家として赴任したわけである。

当時、既に南部のアルト・パラナ分場で、多くの畑作試験が実施されており、それを参考にしながら、手さぐりの試験を始めることになった。しかし、南部とは条件が異なり、一年目の大豆試験は病虫害の大発生に見舞われて、まともなデータがとれぬほどの惨状を呈し、あらためて熱帯圏の厳しさを痛感させられた。

元来、バ国の農業生産は、畜産を除くと東南部諸県に支えられており、試験機関としての①カアクベ、②GRIA及びアルト・パラナ分場、そして③バ農総試の三者は、重要な三角点を形成しているわけである。この意味で、それまで欠落していたイグアスの畑作試験が開始され、その一翼を担う事になったことは、極めて有意義な転換であつたと思われる。

たまたま農牧省では、小麦のプロジェクトが進められており、小麦増産の一大キャンペーンが展開された。イグアス地域での推進会議には、大臣が直々に出席して盛り上げると共に、帰路、試験場に寄つて、小麦増産の問題点について熱心に議論された。このような事は、日本では到底経験できないことで、いさゝか面喰つたことが懐かしく思い出される。その他、二年目の大豆試験では、その播種に当つてカアクベから数名の研究員の応援を得たり、小麦栽培の問題点を検討する為、GRIAの町田氏も参加して日バ合同の研究会在カアクベで行われたり、両国の協力関係が非常に緊密になつた。

翻つて、いま日本は国際協力の面で、経済発展に伴つた応分の貢献をなすべきことが強く求められている。いろいろな形の協力関係が存在するが、人間的な繋りを背景とした協力関係が極めて重要であると思う。

各地で成果を挙げている青年協力隊の活躍は、その端的な現れであろう。永続性があること、その地に定着し、喜んで迎え入れられることは重要な要因と思う。このような意味で、移住地の発展は、単に移住者の幸福であるばかりでなく、同国の発展にもつながり、大きな国際協力の実をあげるものと確信している。

25周年に当り、バ農総試の新たな飛躍を願つてやまない。

在勤期間 1979年10月-1981年10月



## “在勤當時を振り返って”

元畜産専門家 和田 恭 則

関係者の方々に、パラグアイ農業総合試験場25周年の喜びを心からお祝い申し上げます。私は、1980年8月着任し、1983年11月までの3年3カ月間、派遣農業専門家としてイグアスでお世話になりました。

当時の試験場は、畑作(大豆・小麦)、野菜、土壌保全、畜産の四本の柱を組み、試験研究に取り組んでおりました。そのなかで、畜産は優良牛の配布、肉牛飼養の改善と安定という大課題を抱えておりました。特に冬季飼料の確保に関しては、放牧地にあつて飼料の確保を図る為、低温成長並びに高タンパク牧草の栽培試験を、貯蔵飼料としてサイレージの給与試験を、また年間を通して当地の適性放牧頭数把握の為、幾つかの調査も行つておりました。

一方、獣医師として移住地内の予防衛生、家畜診療も行いました。パラグアイでは、薬品は手近な所で入手しにくく、高価、種類は限られている。しかも、生産物が安価である為、いかに病気を未然に防止するか発病してからでは手遅れになる。何れの仕事も経費をかけずに、いかに生産を上げるかが基本にあつたように思われます。また、畜産は親・子・孫と三代にして形の出来てゆくものと考え、イグアス移住地の歴史は25年、やつと二代目が育つてきた状態であります。さらに、農業は自然を相手とし、時に従い、時に刃向かいながら営むもので、ともかく一歩一歩進む事が大切であると痛感いたしました。

最後に、移住地の皆様方が、パラグアイ国の農畜産業の振興、発展に益々寄与され、パラグアイに新天地を開かれることを祈念いたします。

在勤期間 1980年8月-1983年11月

## “懐かしいイグアスそしてパ農総試”

元場長 奥村 孝 夫

私がパラグアイ農業総合試験場に着任したのは、1981年5月27日でした。それから3年と10カ月そこで過した月日は、私の一生の中でも決して忘れ得ぬ鮮烈な思い出の残る時代でした。木々の緑と芝のまぎれもないのちの匂い。何処までも澄みきつた青空と真紅の燃えるような大きな落日の太陽。それらが東京という人混みと喧騒の大都会にしか住んだことのない私にとって、如何に強い印象を与え、限りない深さを感じさせてくれたことか。いわば50年の人生の中で最も貴重な、そして心洗われる一時期でもあつた訳です。

ちょうど、着任した直ぐの8月に、イグアス移住地20周年の行事が盛大に催され、記念式典に慰霊祭に、そして運動会に出席させていただいたことを懐かしく思い出します。

試験場では、その夏から農業専門家の増員が実現し始め、私のいる間中・長期展望をつくり、総合農試として恥ずかしくないだけの基礎づくり懸命でした。今や、それが立派に実り、ピラボの分場との合併も行われ、パラグアイ国の試験機関との交流も盛んになり、25周年を迎えるに至りましたこと、その一端も担つた私にとって望外の喜びもあり、紙上を借りてお祝い申し上げます。

時が移り過ぎるにつれて、人々の生業も生活も様々に変わつてまいります。最近ふと目にした海外移住誌に、パラグアイのトマトは赤色果のアメリカ種が殆んどだと載つておりました。私の居た頃のイグアスのト

マトは「のぞみ1号」だけでした。この新しく導入された品種も、やはり天然のうまみのある味わいのものでしょうか。日本のスーパー店頭に並ぶ、外見は確かに美しいが、すつかり人工的な味と化したトマトを見るにつけ、イグアスの味を思い出します。

いつまでも自然の豊かさと味わいを心に求めて、バグアイの全日系移住者の方々、試験場の皆様方の健康をお祈り申し上げます。

在勤期間 1981年5月 - 1985年5月

## “思い出の記”

元畑作専門家 尾崎 薫

二代目の畑作専門家としてバ農総試に赴任したのは、1982年4月でした。与えられた任務の一つは、イグアス移住地の畑作振興に寄与する畑作物の標準耕種基準の確立にありました。しかし、これまでに経験したことのない亜熱帯の気象・土壌条件下の仕事であつた為、一抹の不安がないわけではありませんでした。

短期間に効率良く試験研究を進めるには、目的を明確にした試験設計の立案と、一作一作の試験を失敗しないように行い事が必要でした。畑作担当職員であつた古賀さんが、灌漑施設の整備に尽力され、試験ホ場だけは乾燥に起因する発芽障害が防止でき、早魃による生育不良も回避することができたため、在任中に着手した試験は、総て目的を果たすことが出来たことは、彼の大きな功績だつたと思います。また、より精確な試験成果を得る目的で、赴任した年の夏、枠試験を提案したところ、湯川さんが陣頭指揮をとり、炎天下短時間の間に木枠を埋設され、夏作大豆から直ちに試験を開始することが出来ました。その後、この枠試験から数多くの情報が得られたことも嬉しい思い出の一つです。

在任中、現地補助職員の三田村、山脇、関の諸君が、私の試験業務を支えてくださいました。これらの方々の尽力がなかつたら、恐らく数分の一の仕事しか出来なかつたと思います。特に、関 節己君とは三カ年一緒に仕事をし、勤勉で真面目な関君には、バ農総試の将来を背負っていたゞきたいと願つていたのですが、私の帰国後、不慮の死を遂げられたことは痛恨の極みです。彼のご冥福を祈ります。

在任当時のバ農総試は、在外職員は奥村場長以下四名、現地職員一名、畜産専門家一名、現地補助職員若干名の小世帯でした。その後、移住事業の再評価を期に、バ農総試の集約化に伴うアルト・パラナ分場の統合、移住派遣専門家の1号専門家への切替え、専門家枠の拡大が図られ、バ農総試の充実が進んできたことには嬉しい限りでした。1982-86年の間は、まさにこうしたバ農総試の一大転換期であつたように思われますが、成熟期を迎えつゝあるバ農総試は、やがて大きな実りの時期を迎えることゝ思います。時の流れと共に人は変わつても、バ農総試の役割は変わらぬものと思いますので、試験場の本質を見失わぬよう、しつかりと申し送りをして、益々発展されることを祈念いたします。

蛇足ですが、在任中の大豆・小麦の試験研究成果の概要は、移住事業部業務資料No. 773 および移住研究No. 24に取り纏めましたので、関心のある方はご覧いただければ幸いです。

在勤期間 1982年4月 - 1986年4月



# “ 雑 感 ”

元土壤肥料専門家 山下鏡一

昭和70年頃だつたと思うが、折からの不況の煽りを食ひ、我が家でもブラジルに移住するという計画が持ち上がった。しかし、いつの間にか、その話も立ち消えとなつた。親父は農業の経験は皆無だつたし、かといつて、商売にも不向きな性格であつたので、恐らくサンパウロ辺りで、一家が路頭に迷つていたかも知れぬと思ひ半面、数十年を経て、初めてブラジルのさんさんたる太陽と広大で無限の可能性を秘めた大陸を見て、すっかり魅せられ、若い頃に行けなかつた事に対する悔恨の情も、また絶ち難い。幸い、耳順になり、遅ればせながら南米で移住に関係した仕事をする事になり、4カ年をイグアスで過ごすことになつた。それまで、移住に関して全く無知、無関心で、南米にブラジル以外に移住地のあることも知らなかつた。今となつて、その不明を恥じると共に、周りを見ると、私に似たような人の意外に多い事を見るにつけ、何とかならないものかという焦りに似た気持ちを覚える。

イグアスに居つた間に、特に気になつたことの一つは、各国間における移住者の違いについてであつた。パ国には各国からの移住者が住んでいたが、それぞれ国によつて特徴があつた。ドイツをはじめとするヨーロッパ系は、ほとんどが農業、特に畜産を営み、彼らの中には土に関する知識、関心が深く、高度の専門書を読み、また土を本国に送つて分析を依頼している者もいて驚かされた。また生活環境は整備され、家屋や庭は本当に美しく、良く手入れが行き届いていた。彼等は、移住地を仮り住いとしてではなく、そこにすつかり根を下ろして、生活を楽しんでいるように見受けられた。入植時における自己資金が違ふのだと教えられたが、移住ということに対する考え方に、基本的な違いがあると見られ、移住事業を進めるに當つて、これに関して深く真剣に検討する必要があると考える。

中国、韓国の移住者は殆んどが商売をしており、生活力に満ち溢れている感じで、年々すごい勢いで増えつゝある。これに対して日系は、出稼ぎや嫁で日本に帰るもの、土地を引き払つて帰国するもの等が目立つた。帰国の理由は多様で一律に論ずるわけにはいかないが、入植時の筆舌に尽し難い辛酸を乗り越えて、ようやくこれからという時に、土地を手離して帰国するのを見るとき、残念でならなかつた。

試験場も二十五周年を迎えたが、その間、幾多の変遷を経て、最近、普及課が新設され、各専門部門も充実し、名実共に総合試験場として体制が整つた。これから真価を発揮し、移住地のみならずパ国の農業発展のためにも果す役割の大きさは量り知れないものがある。

心から発展を祈つて止まない。

在勤期間 1983年6月 - 1985年6月

## “ イグアスの畜産 ”

元畜産専門家 田口本光

私がパ農総試に、畜産専門家として赴任したのは、昭和59年6月でした。それから約2年2カ月の間、場内においては、以前より飼育中のサンタヘルトルーデイス種の増殖と衛生管理、場外においては、日系農家を中心とするイグアス移住地の牧畜、酪農家の営農指導及び診療や人工授精、寄生虫検査等を行いました。当時の診療簿を見ますと、約3分ノ2が日系農家の診療で、残りの3分ノ1はパラグアイ人、ドイツ人、ス

イス人等の農家の診療だつたことがうかがえます。他の移住地も同様だと思いますが、今後、当国の日系移住地が発展してゆくためには、日系以外の人々の存在も見逃せず、彼らとの良い関係を続けることが重要であろうと思われまゝ。ことに畜産に関しては、特にヨーロッパからの人々は、歴史的に見ても、また、熱心な勤勉家が多いことから見ても、日系農家が学ぶことが多々あるものと思います。

現在のイグアス移住地日系農家の営農形態は、大きく見て畑作、野菜、畜産が各3分ノ1づつ程度と考えられますが、畜産移住地として出発したことからか、移住者諸氏に話を聞いてみると、将来的には畜産を経営に取り入れてゆきたいと考えている人も結構居るように思えます。

パラグアイは周知のように、肥料や農薬等は輸入に頼っています。むろん、畜産においても、発展した改良草地の使用等を考えると、肥料の必要は充分にあるのですが、今のところは、草地に肥料を入れるまでには至っていません。その点で他の営農と比較すると、畜産は当初、設備に資金が必要なもので、一般的な営農経費は非常に安く済むのが現状かと思われまゝ。また、今後長年にわたり、子孫の代まで農業を中心とした経営を続けてゆくことを考えると、土壌保全は避けられぬ問題といえます。この点でも、何らかの形で畜産を営農に取り入れてゆくことが、今後、必要になるのではないかと考えまゝ。

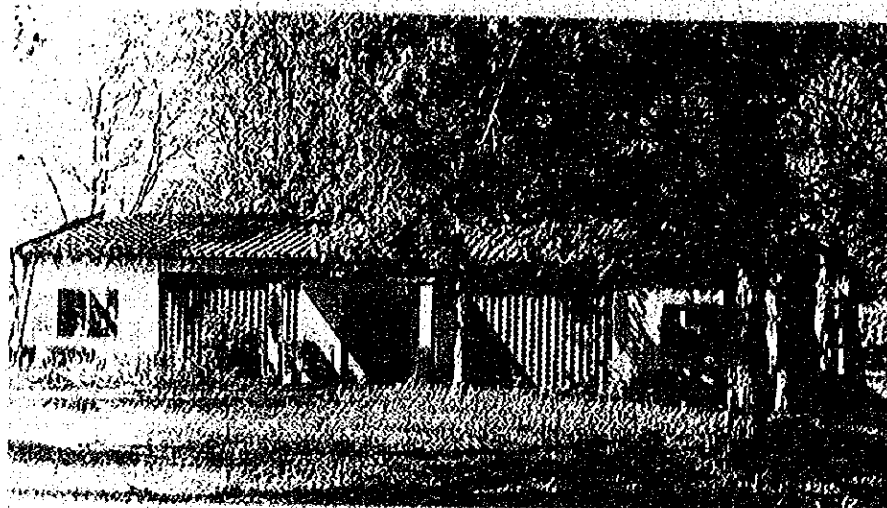
これらの意味からも、パ農総試は長期的展望に立つた上での複合経営を考えるべきです。また、当国で唯一、こういった総合的な研究が出来る重要な組織であるという認識の上に、今後の活動を発展・拡大してゆくことが、日系移住地、さらにはパ国の農業にとつても重要なことであると考えまゝ。

末筆ながら、パ国の、また、日系移住地のさらなる発展を心より願つております。

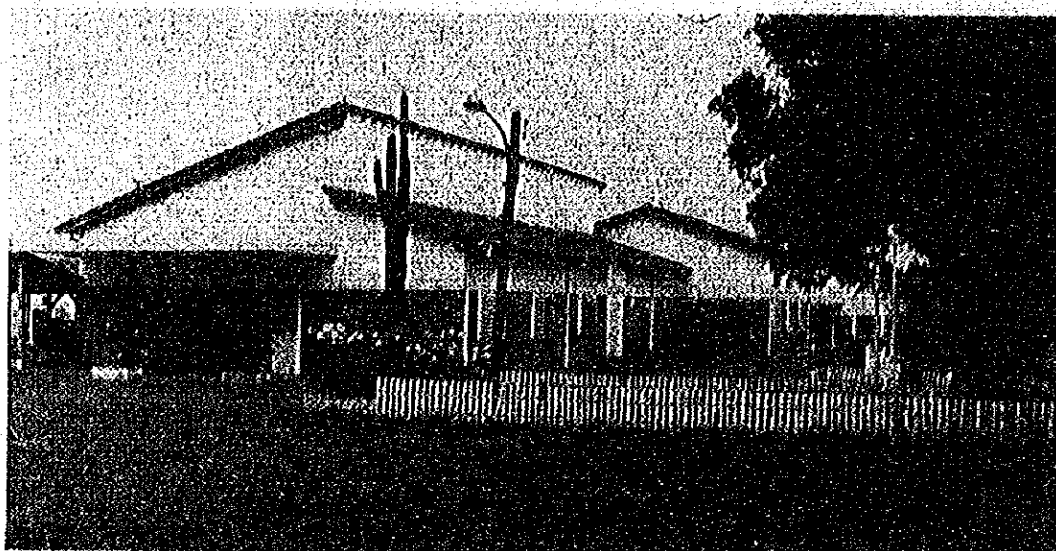
在勤期間 1984年6月-1986年8月



A バ農総試 “過去の証明”



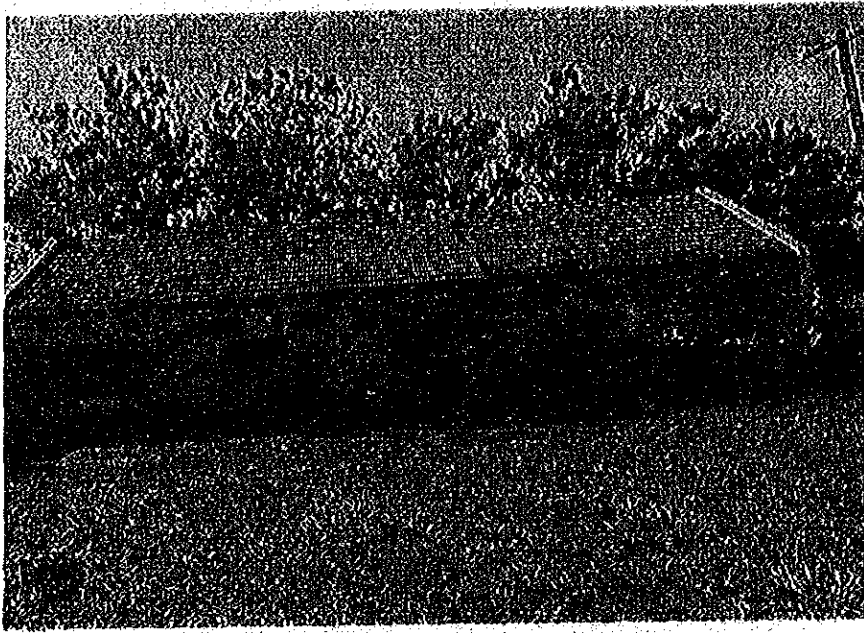
A-1 今も人夫宿舎として現存するイグアス試験農場時代の事務所



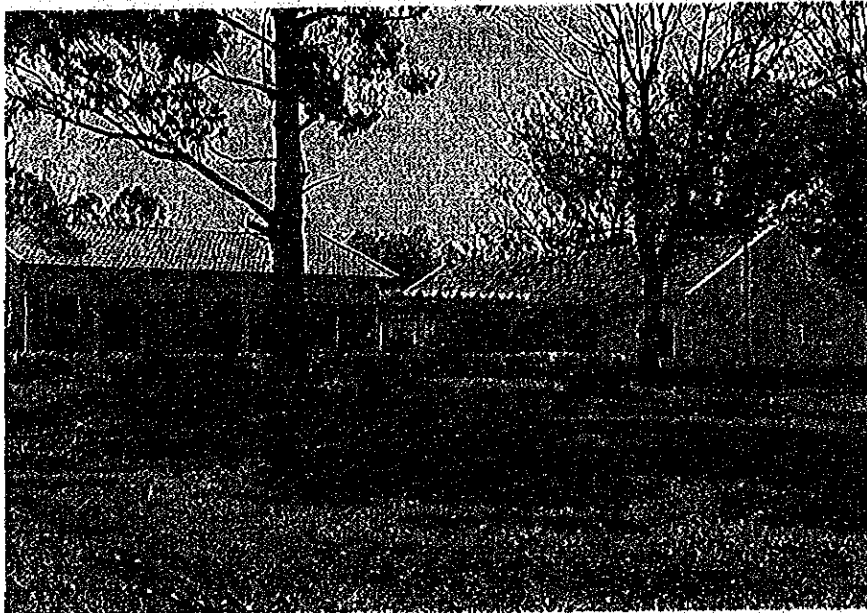
A-2 '74年～'86年迄の事務所外観 落成式にはストロエスネル大統領も臨席 (写真3 参照)



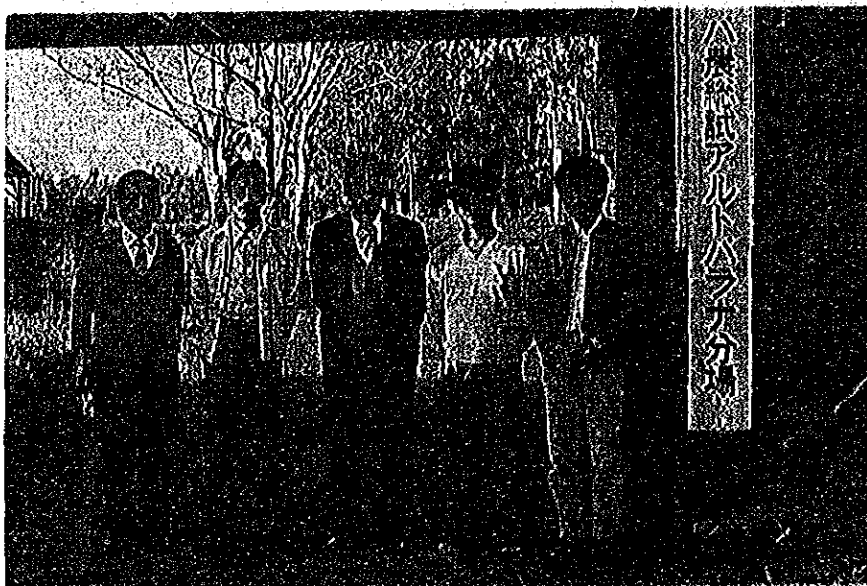
A-3 ストロエスネル大統領の列席を得、盛大に挙行されたバ農総試新館落成式。1974・9



A-4 アルト・バラナ指導農場時代から閉鎖時迄使用された旧分場の事務所。 1980年



A-5 イグアス本場統合前の旧分場事務所と数々の講習会を実施した研修会室。 1985年1月



A-6 CRIAの専門家を迎えての旧分場スタッフ。 '84年



A - 7

原始林直開方式による採種ほ場の造成。(1976年) この頃から旧分場では採種業務が本格化した。



A - 8

旧分場敷地100haの航空写真。ここで数多くの大豆・小麦品種を育成・普及した。1981年



A - 9

旧分場の穀物種子  
庫。裏側からコン

バインで直接収納するシステム。最盛期にはここから60トンの優良大豆種子を分譲配布した。1983年



A - 10

時は海外移住事業団の頃。

芭・墨・伯、營農、融資担当者の勢揃い！



A - 11 今は昔の語りぐさ！

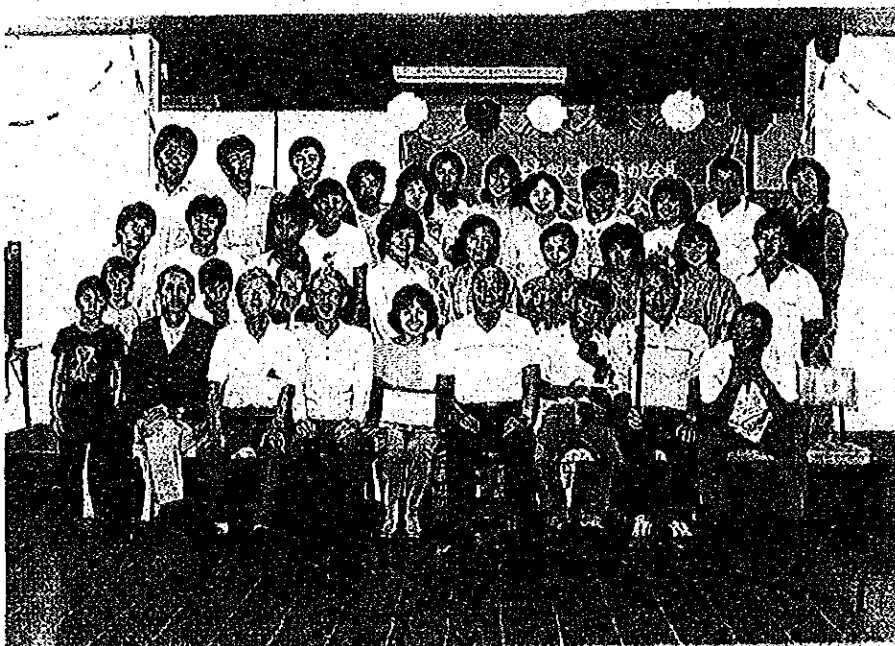
イグアス指導農場（海協連）の建物が完成する以前の海協連と振興会社の職員宿舎。

1962年、現在のイグアス事務所職員居住区近辺。

A - 12

コロニアの運動会に事業団職員も他の企業と合同し、1チームを編成、出場。

1974年

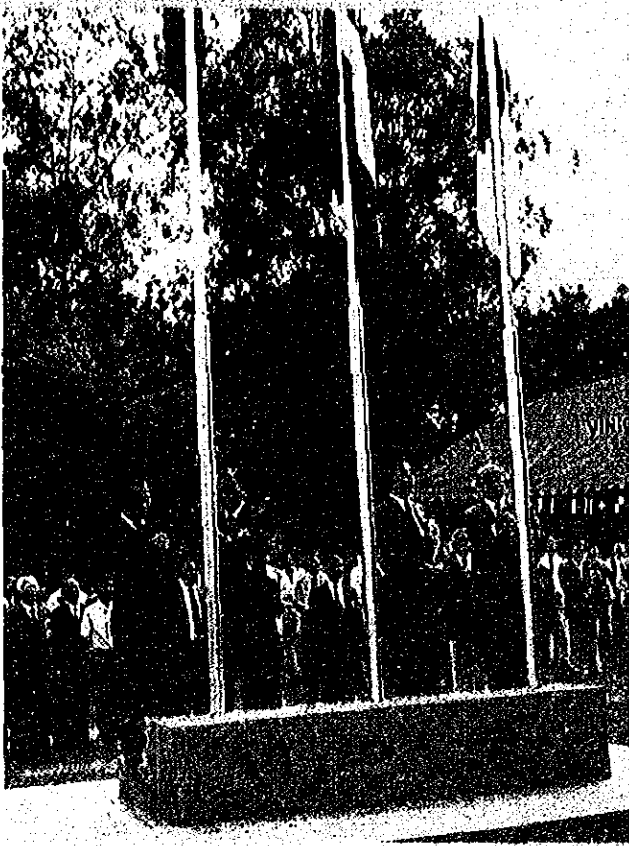


A - 13

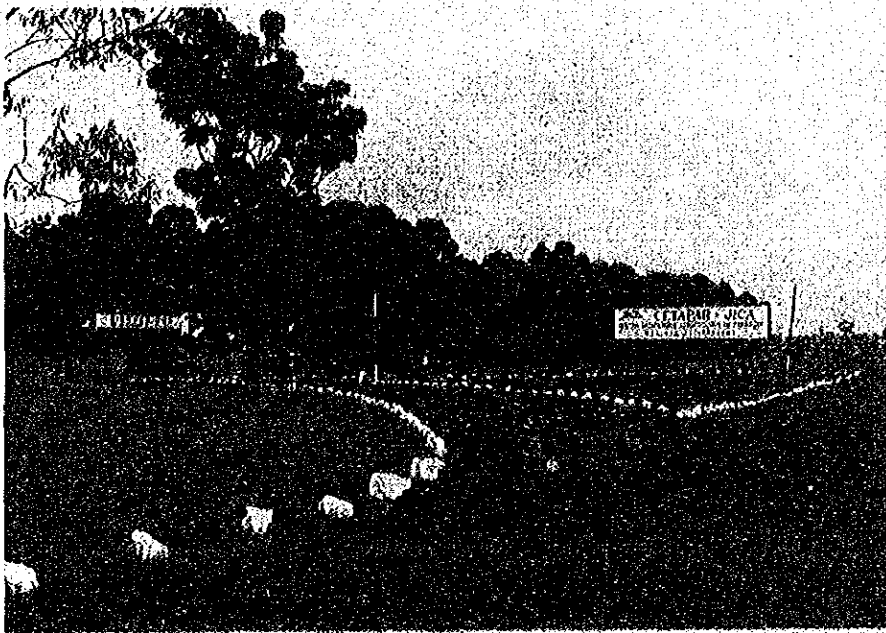
当農試親睦会（テレレ会）  
歓送迎会の1コマ。



“4分の1世紀目の式典”



B-1 25周年記念式典は1988年2月25日  
パラグアイ国旗を中央に日章旗とJICA旗の  
掲揚によって開始された。



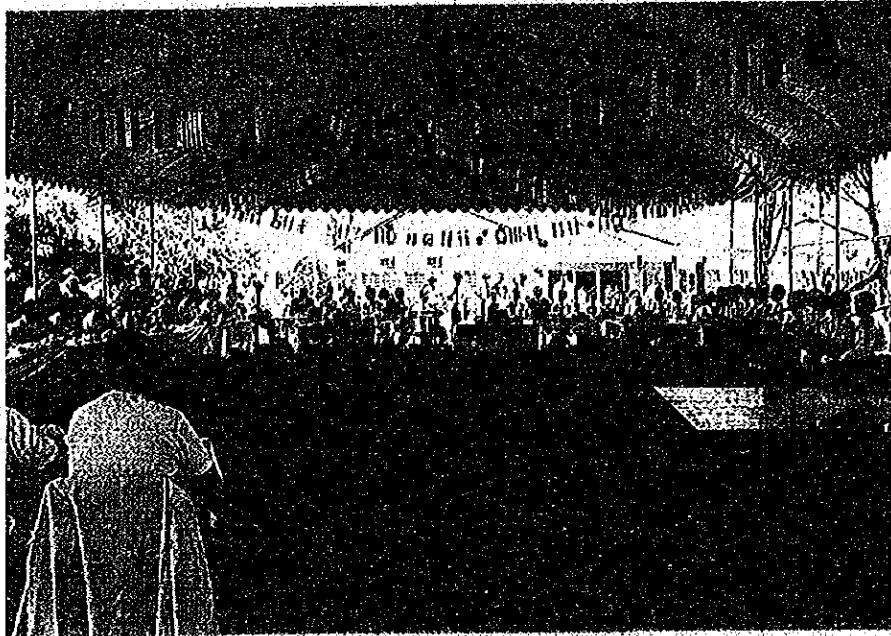
B-2 創立25周年を機に国道に面し  
て新しく立て直された  
CETAPARの看板。

B-3 式典参席の  
現地要人となごやかに  
歓談する西野事務所長。





B - 4 車庫を利用して特設されたパネルと写真展の前で地元テレビ局の取材。



B - 5 野外特設会場に日バ両国 約100名の人々を招いて和洋折衷の昼食会。

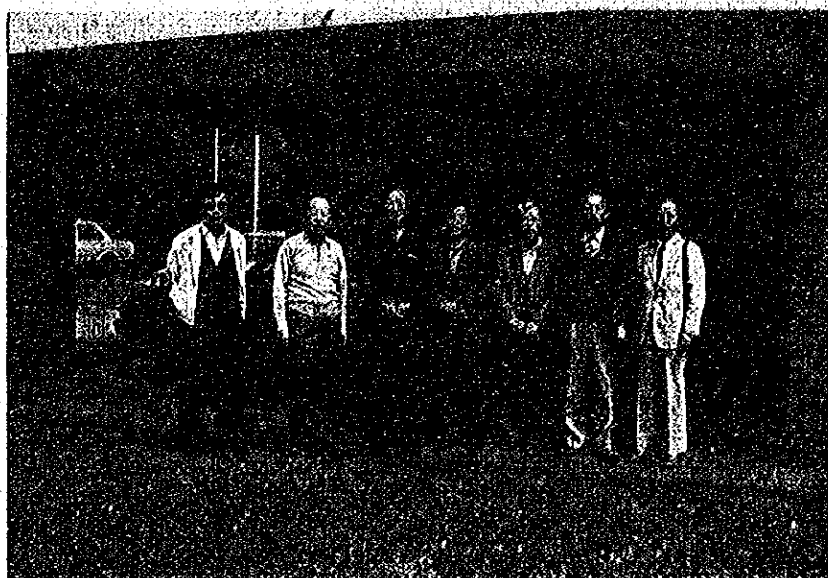


B - 6 会場での特別アトラクションでは当農試職員の方と、開発青年がハーブを演奏。

## C バ農総試 “現在の証明”

### C-1

1985年度に普及課の、  
1986年末に管理課の各部  
屋を増築し、拡大された  
事務所前景。



### C-2

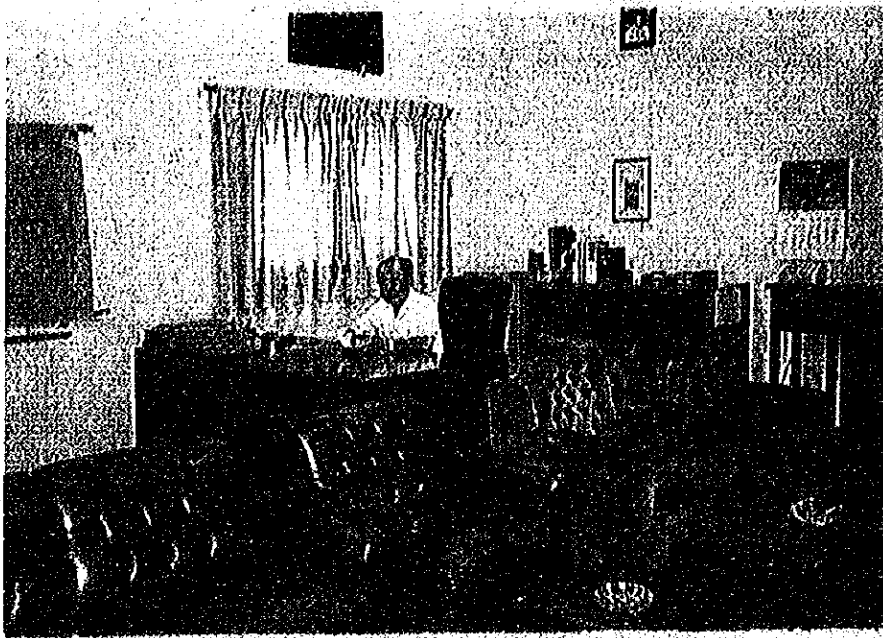
この25年の歳月のうちに数多く  
の人が訪れた事務所正面玄関。

1988年 9月 (村山理事提供)

### C-3

25周年記念行事の際には  
特設会場となった広場と  
車庫。( '88年)

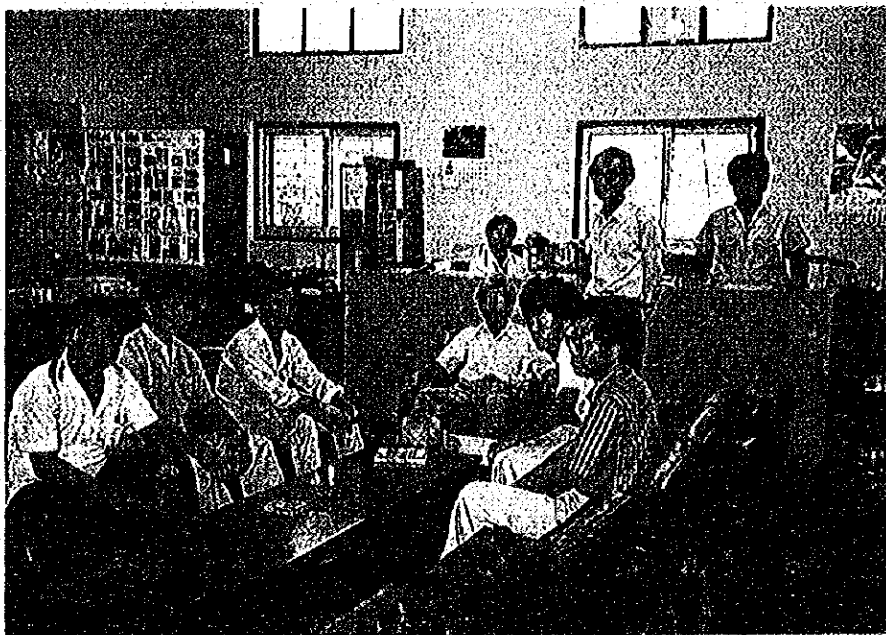




C - 4 場長室 (1986年に拡張)



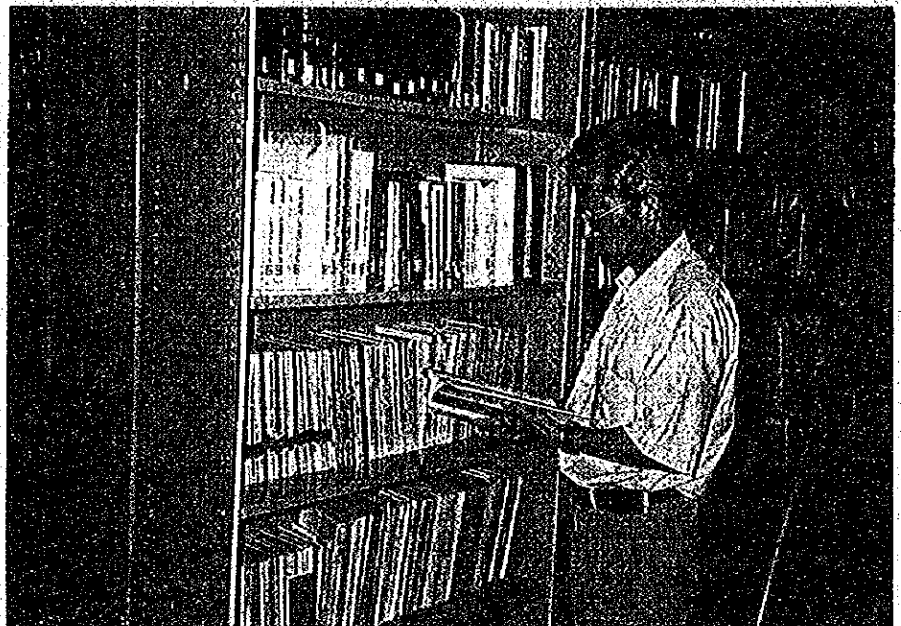
C - 5 管理課 (1986年に増築)



C 6 研究課とそのスタッフ。



C-7 普及課とそのスタッフ (1985年に増築)

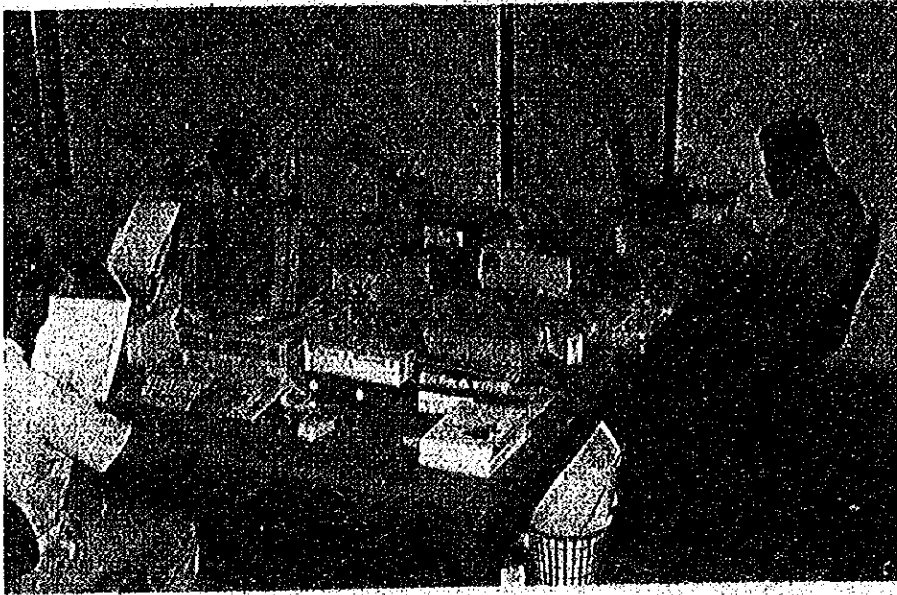


C-8 図書資料室 (現在の蔵書, 資料約2千冊)



C-9 専門家の着任

と共に一応の器具と薬品類が整備された病虫草害実験室。1986年末、整備。(旧生糸検査室)



C - 10

データ処理と書類の  
作成に1台のコンピュ

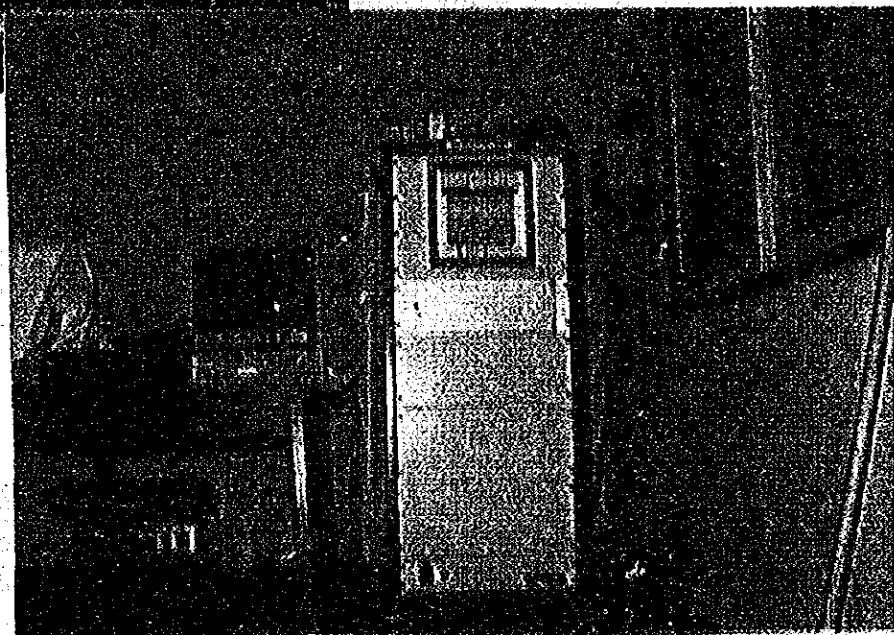
ーターと2台のワープロがフルに稼動する臨時  
のOA機器室。1987年末（会議室を充当したもの）

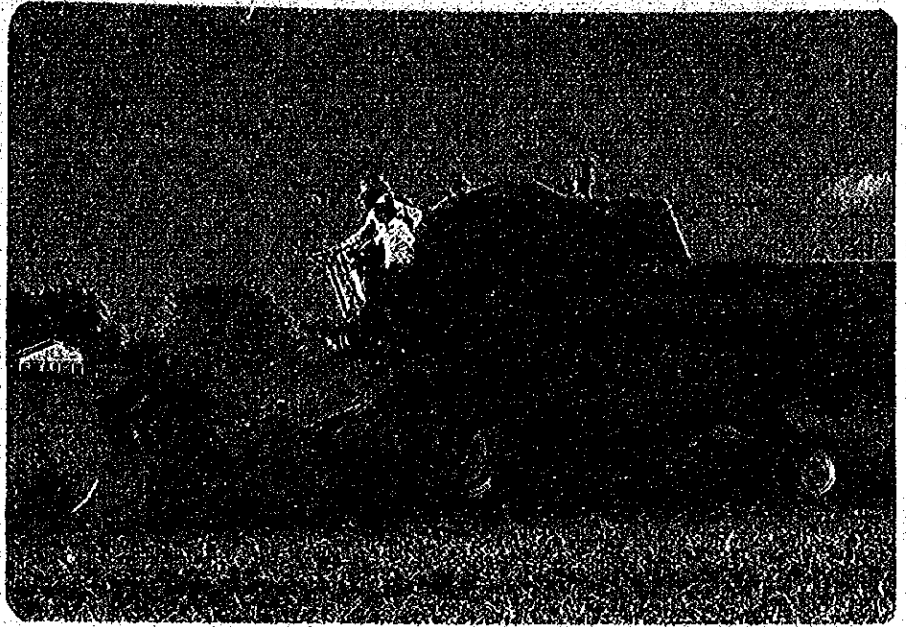


C - 11

現在のバ農総試。パ国唯一の性能を誇る農業  
気象観測装置IPCシステム。外部の観測器  
（写真左）から地下ケーブルでこのコンピュ  
ーターにデータが24時間記録、集計される。

（1988年10月設置）





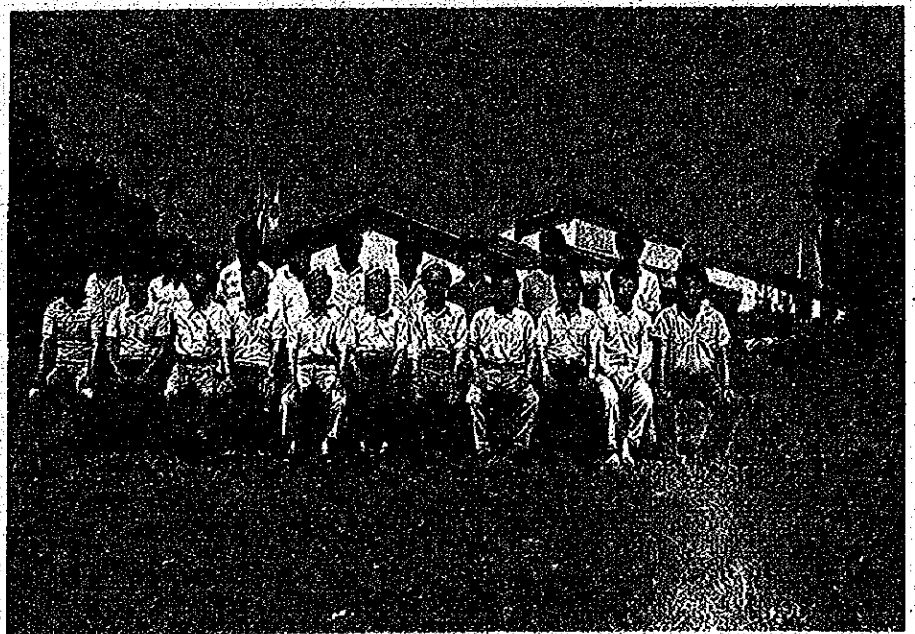
C-12 採種業務に威力を発揮する当農試のコンバイン。



C-13

パ農総試職員・専門家で

構成する親睦会（テレレ会）の出資と共同作業で完成した遊園地。（1987年完成）

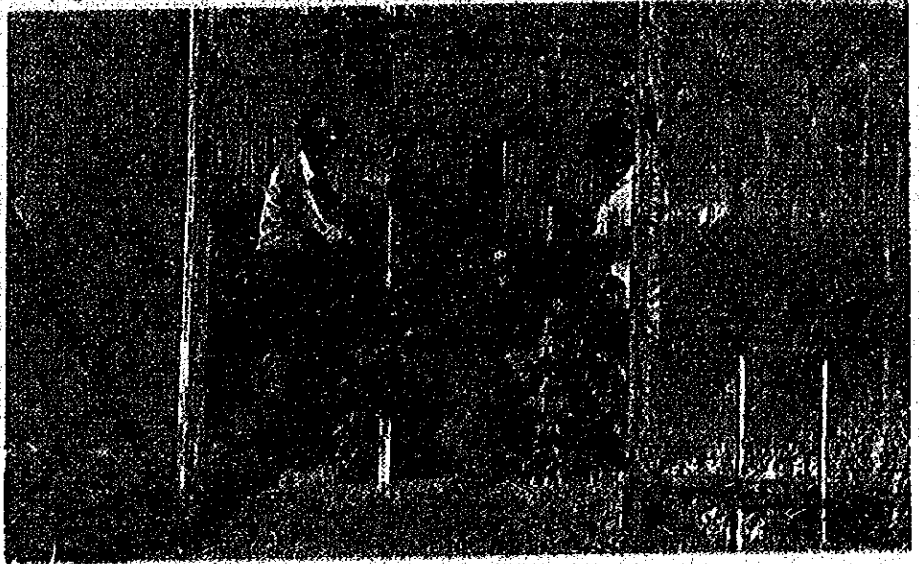


C-14 1988年度下半期の CE TAPAR を担う陣容（職員専門家）。

D 試 験 研 究

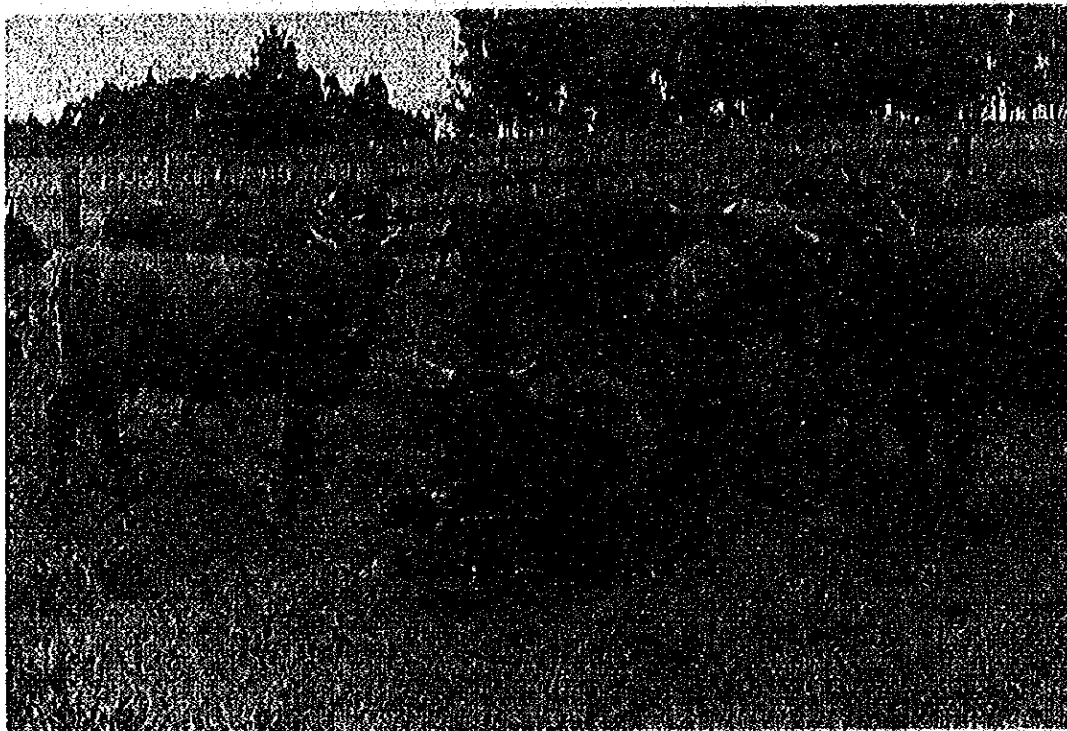
D-1

トマトの雨よけ栽培。



D-2 (写真2葉)

我がCETAPAR伝統のサンタヘルトルーデイスの一群。





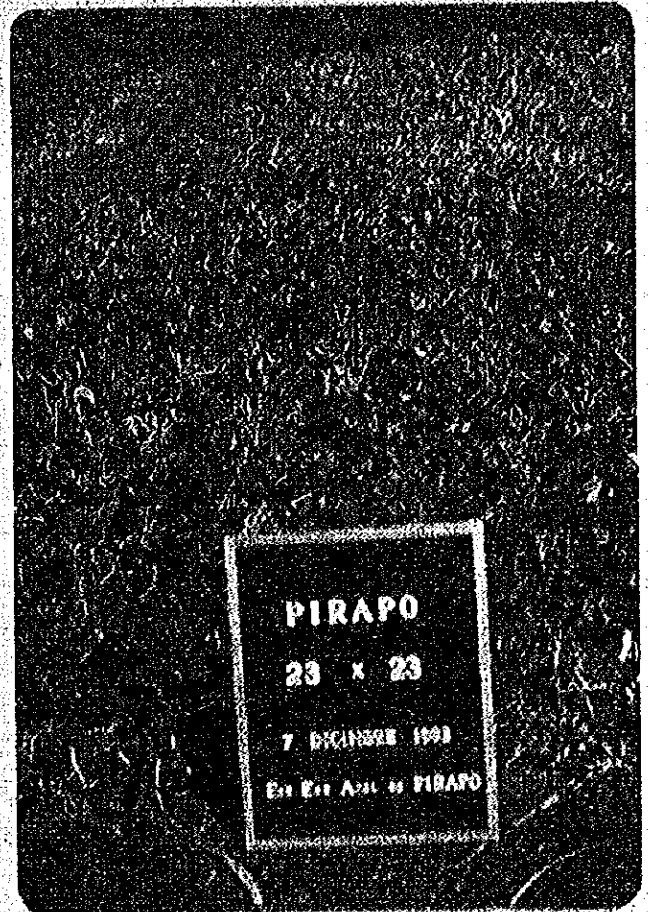
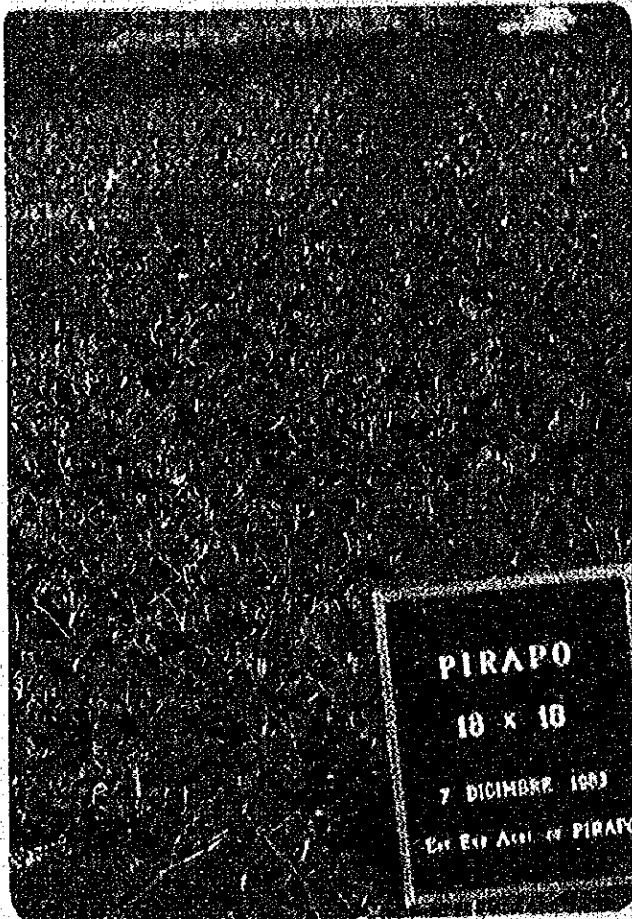
D - 3

牧草コロニアル試験区。



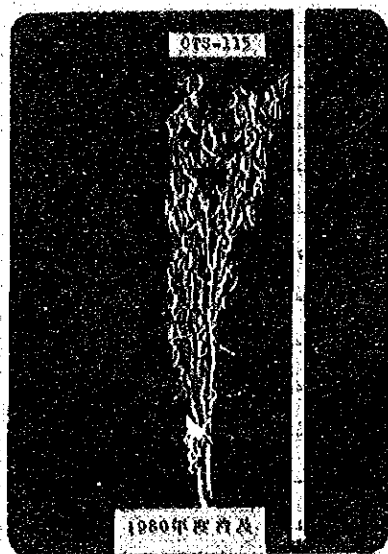
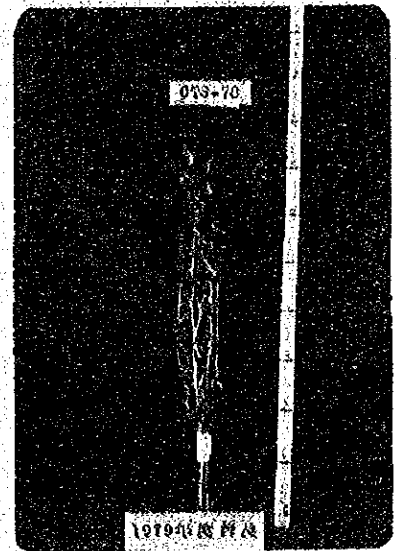
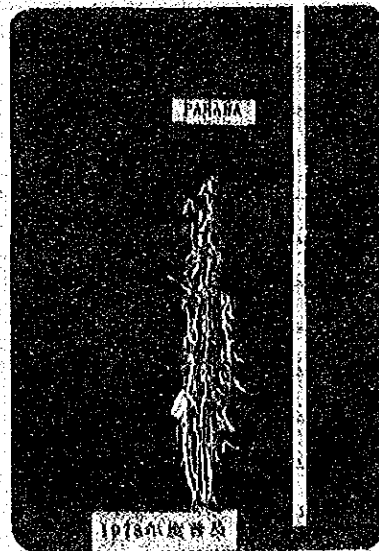
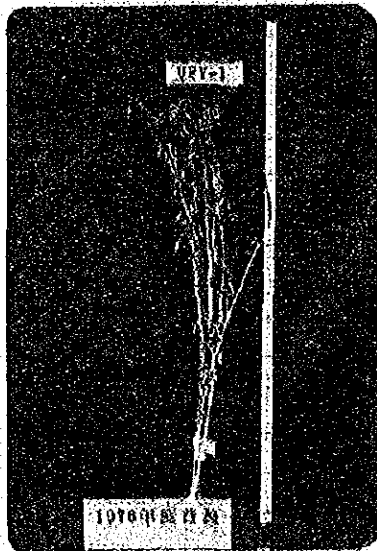
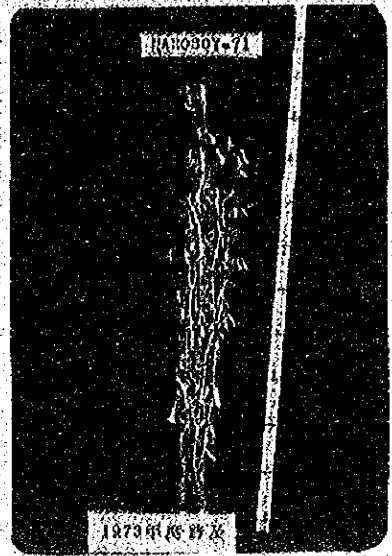
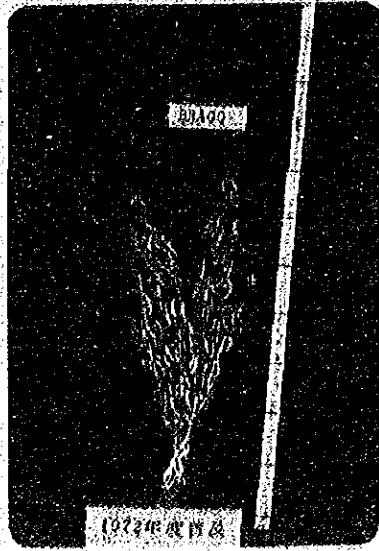
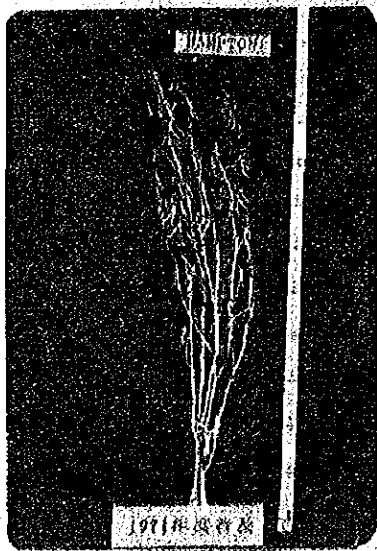
D - 4

小麦の肥料試験。



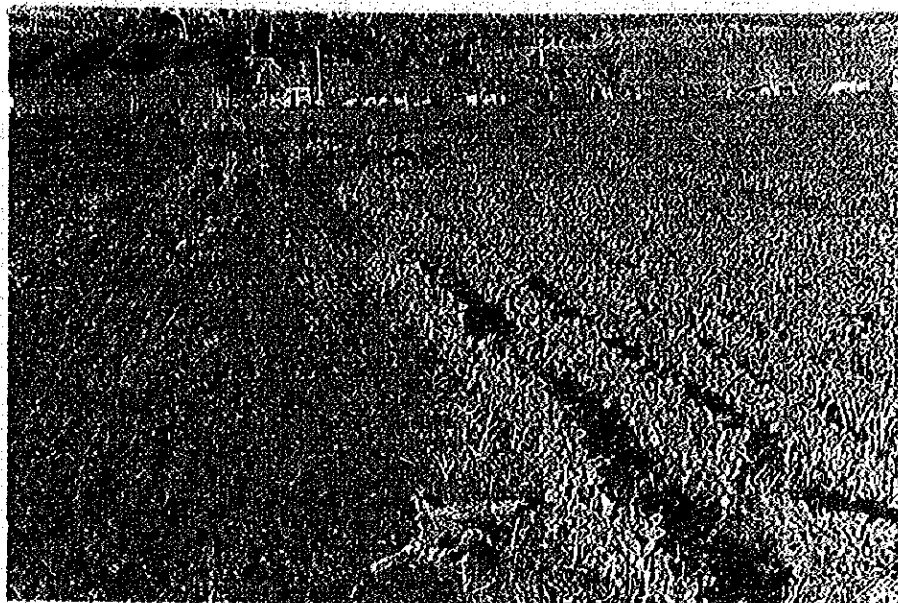
D - 5 (写真2葉) 大豆の栽培様式並びに密度試験。

D-6 (写真8葉) パ農総試がこれまでに育成し普及した大豆の主要品種群。



D - 7

土壤流亡 1982年



11月12日、パ国全域の集中豪雨で、大豆が土壌と共に流亡し、大被害を蒙った。(写真はピラボ入植地)



D - 8 集中豪雨で道路に波打つ濁流。 1982年12月。



D - 9 不耕起栽培 土壤流亡を防止する有力手段としての不耕起栽培。

## E 講習会・研修会

### E-1 養蚕講習会

1960年代の後半から1970年代半ばまで、  
養蚕講習会を毎年のように開催した。



アルト・パラナにて (1971年)

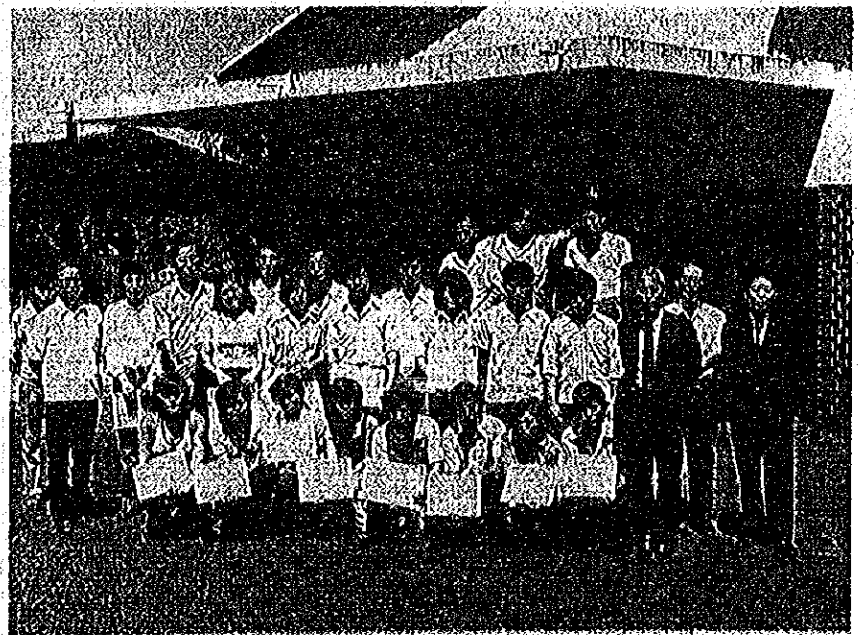


(写真2葉) イグアスにて (1972年)





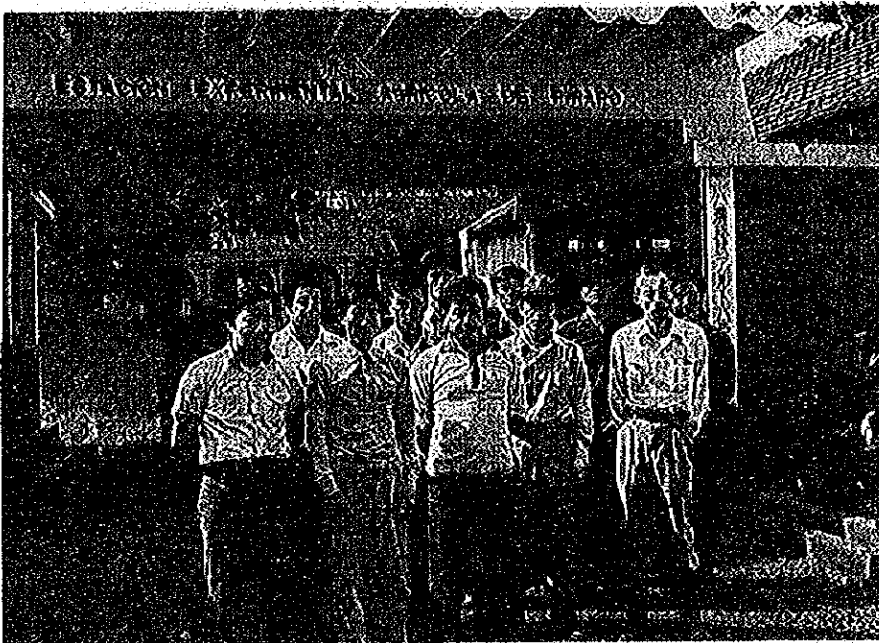
E - 2 (写真2葉) トラクター操作講習会 (1974年)。



E - 3 1977年度農村青年講習会終了日。



E - 4 1979年度農村青年講習会終了日。



E - 5 農業講習生同窓会 (第1回 - 3回生) 1984年 4月20日



E - 6

第一回不耕起栽培パイ  
ロットリーダー育成  
研修会。

(1986年 2月) パラ  
ナ州における不耕起栽培

のパイオニア、FRANK ANNA農場で自家改良型播種機を見学するパ国日系パイロットリーダー達。

## F 研究協力

F-1 (写真4葉)

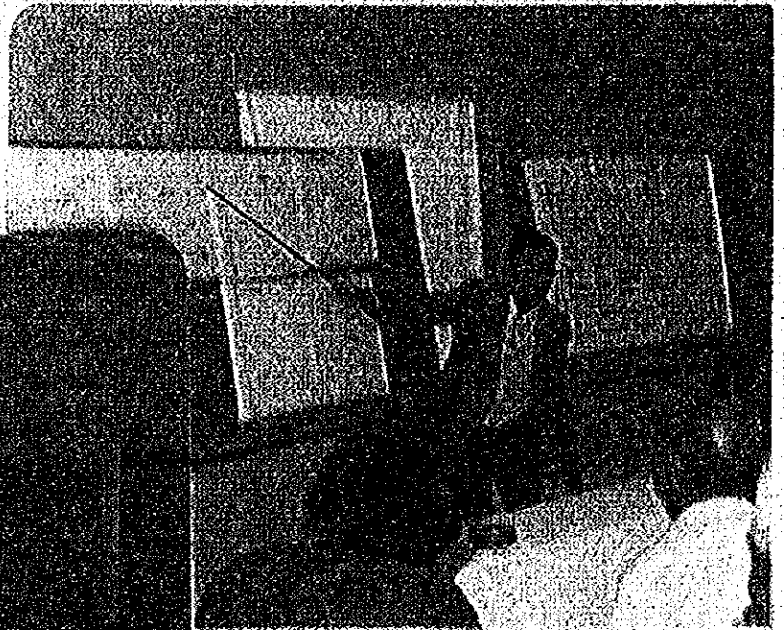
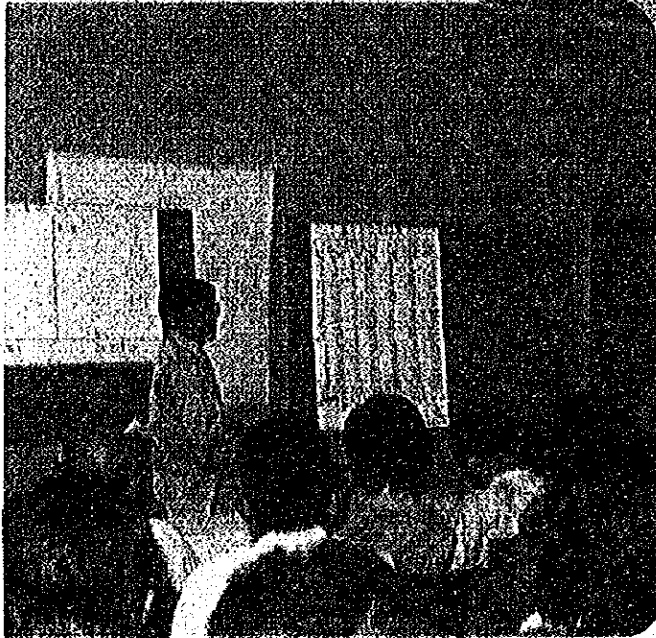
昭和53年度試験成績発表会。

農牧省普及局長，ア大学スト

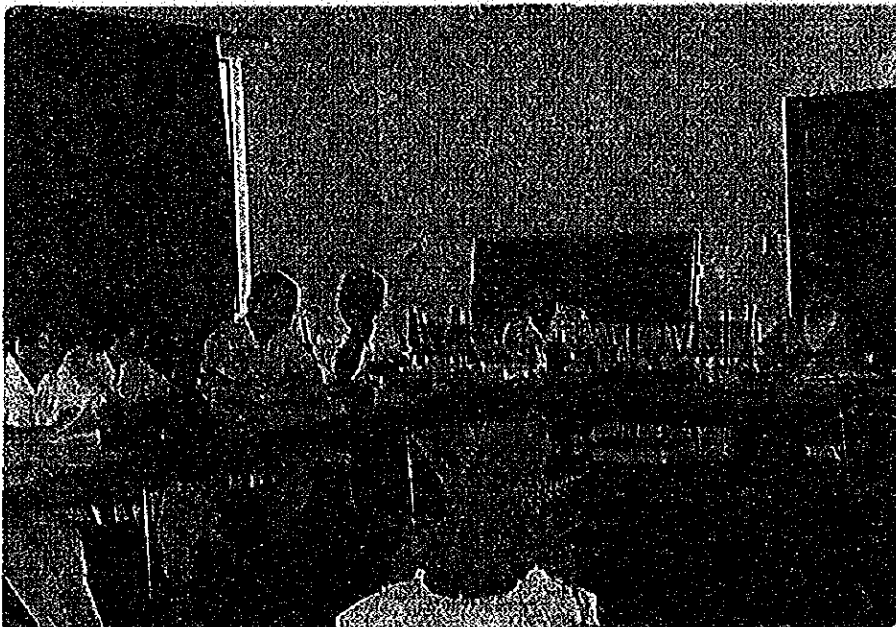
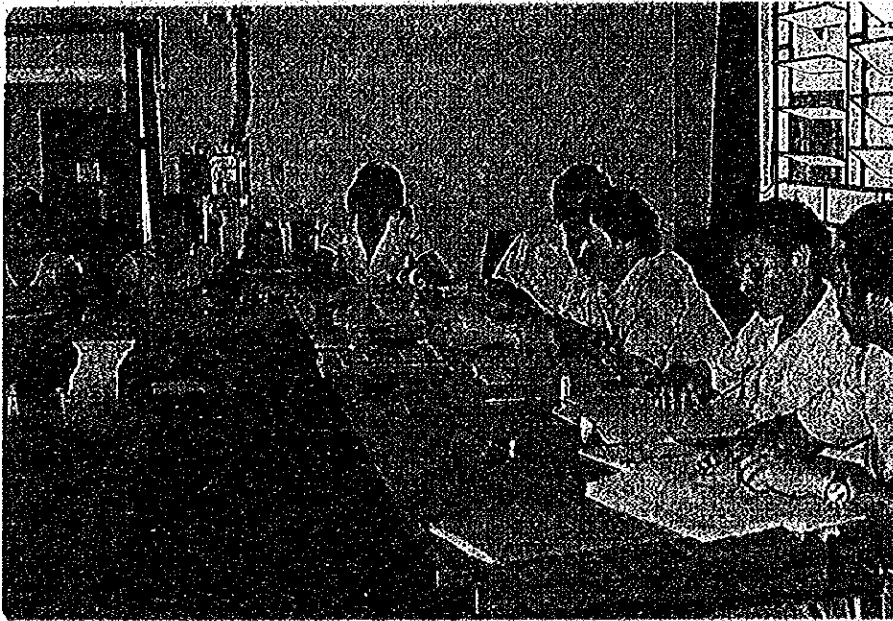
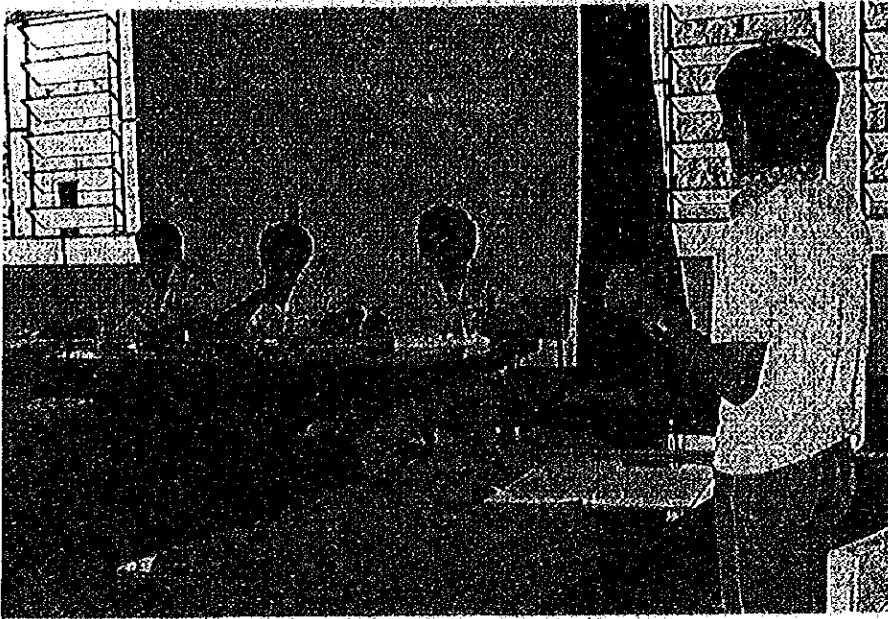
口エスネル分校長，学生，技

術者等，約100名列席。

1979年当農試。



F - 2 (写真3葉) CRIA, 当農試旧分場との試験連絡。(1980年~85年)



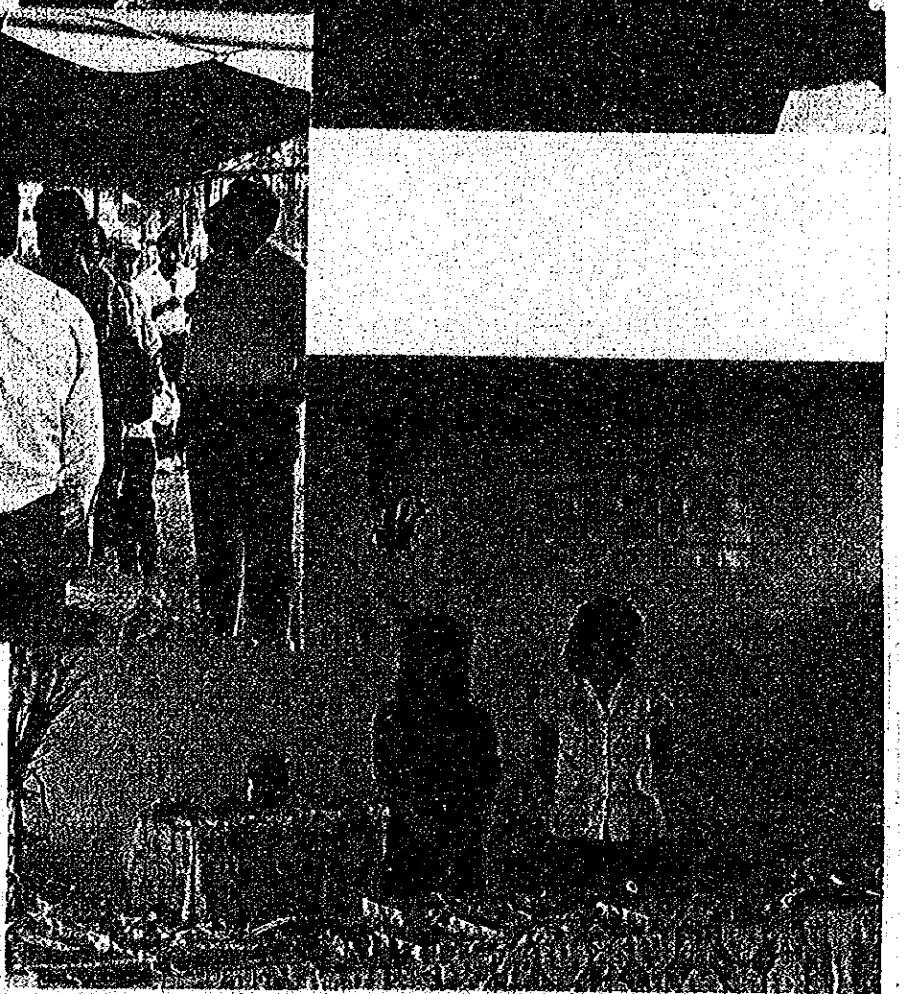
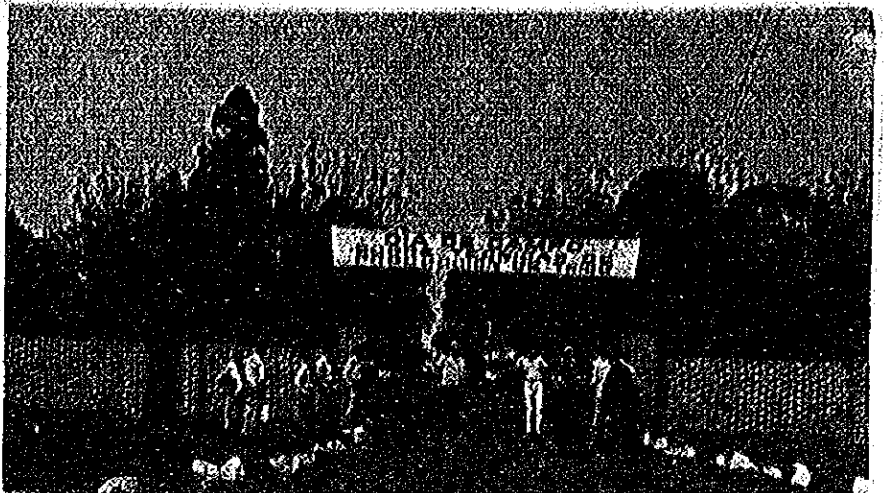


F - 3 (写真4葉)

農牧省，当農試共催

"小麦に関する野外集会"

1987年 8月 2日



## G 品評会・展示会

G-1 パ国日本人移住50周年記念農林畜産物品評会。於：アスンシオン1986年10月。



G-1-1 穀物の部、審査風景。

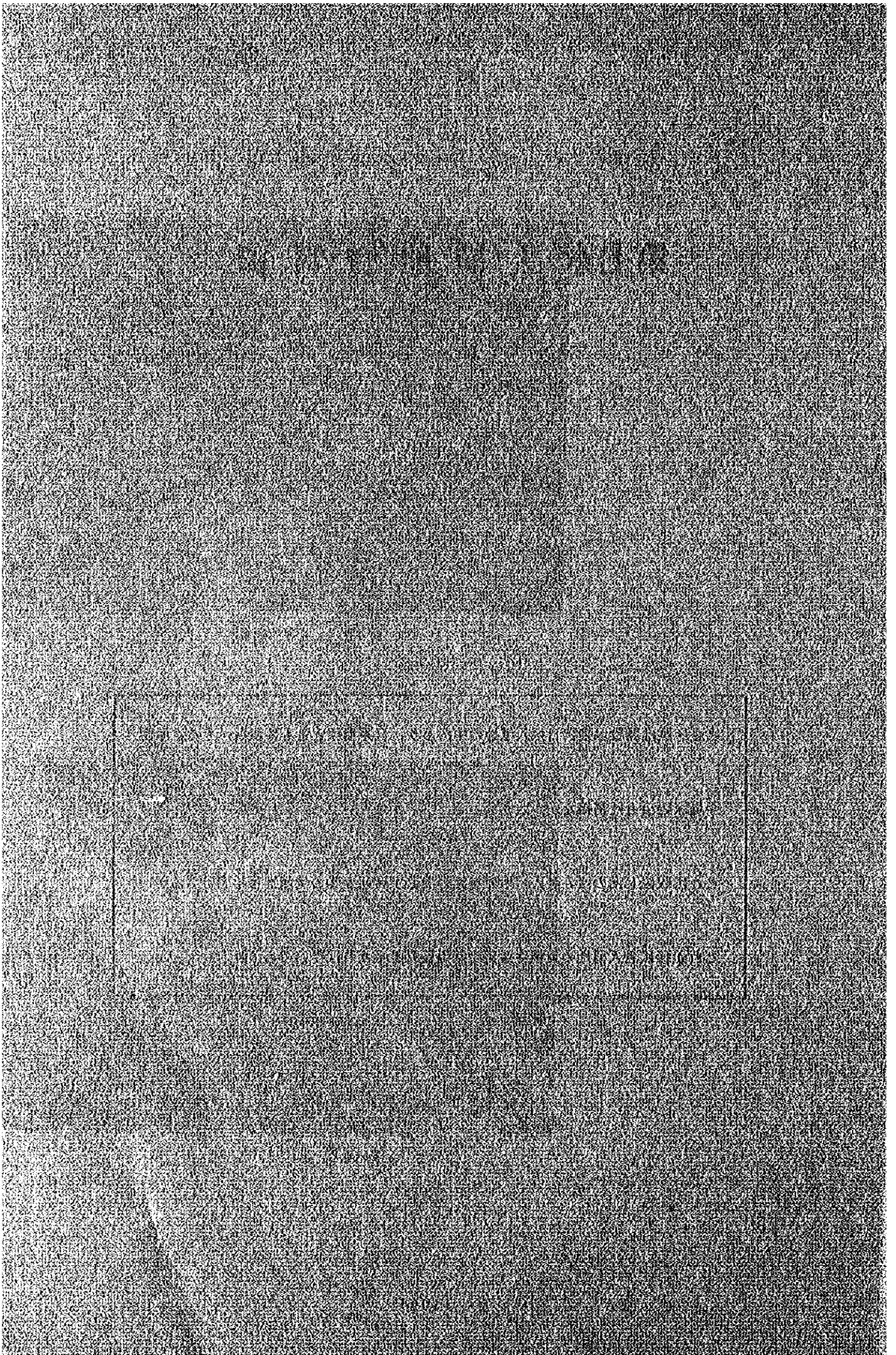


G-1-2 野菜の部、審査風景。

## 第七章 入植地資料編

当農林試は開設以来、日系入植地の中にあり、日系農家とともに歩み、その生産物や農家経済とは密接なかかわり合いを持ってきた。

ここに収録したのは、各入植地の農家経済と主要生産物の生産推移年表であるが、これが後に各入植地の農業生産史の基礎資料ともなれば幸いである。



# 日系入植地の経済発展推移表

第16表

項目	年度	1965					1971					1976					1981					1986					
		トラキ	アラカ	イフス	アムク	平均	トラキ	アラカ	イフス	アムク	平均	トラキ	アラカ	イフス	アムク	平均	トラキ	アラカ	イフス	アムク	平均	トラキ	アラカ	イフス	アムク	平均	
土地所有面積 ha		38.5	46.1	40.3	30.4	40.3	72.1	69.2	51.1	64.9	55.2	141.3	85.6	80.5	127.0	156.7	133.4	134.7	105.3	155.2	154.4	207.5	185.2	141.8	141.6	120.5	50.2
耕地面積 ha		23.7	23.2	27.1	8.6	27.1	41.0	34.8	31.2	16.7	15.7	62.9	47.6	43.4	29.0	19.1	71.7	72.9	72.1	42.6	37.2	94.7	93.5	104.5	72.1	74.3	15.2
農家数人	千	211	137	259	148	259	521	1,531	1,208	1,735	1,809	3,030	2,182	2,775	1,343	1,627	3,445	5,033	6,588	4,004	4,178	14,297	15,638	19,345	13,028	10,910	5,021
農業所得	千	56	42	104	56	104	728	708	570	480	632	1,481	951	1,383	271	94	872	1,681	1,852	627	886	4,702	5,354	1,064	4,971	3,351	2,580
農業経費	千	11	5	51	55	51	266	409	308	300	358	1,095	637	1,052	351	85	153	982	1,579	82	529	4,066	3,689	2,303	4,363	2,342	1,522
負債総額	千	388	204	175	338	175	2,215	1,164	627	1,758	1,007	2,512	1,072	1,028	1,496	844	4,628	4,175	4,904	4,168	2,090	10,862	5,832	8,692	7,952	3,340	785
トラクター所有台数							0.1	0.2	0.1	0.1		0.8	0.9	0.8	0.3	0.1	1.1	1.4	1.4	0.5	0.6	1.7	1.7	2.0	0.6	0.9	0.2
エンバイン所有台数							0.1	0.2	0.1			0.2	0.3	0.3			0.4	0.5	0.8	0.1	0.21	0.65	0.81	0.91	0.16	0.29	
油桐面積 ha		3,896	3,844	1,196	0	0	4,260	3,000	1,100	0	0	1,100	600	240	0	0	850	350	145	0	0	563	226	44	0	0	21
大豆面積 ha		714	946	256	39	26	5,600	3,840	600	530	250	8,206	7,357	1,632	1,040	318	13,320	8,743	2,248	2,353	797	18,580	19,811	3,139	2,954	1,341	
小麦面積 ha			13	10		10		187				1,206	2,405	849	64		4,982	7,483	2,185	386	28	12,945	9,721	3,596	2,046	341	
アイスプラハ ha		374	563	167	43	152	1,000	1,400	190			50	53	4	657	96	176	58		619	102						
綿面積 ha		629	425	76	25	77				90			2	2	55	17	2	44	9	36							88
トマト面積 ha				2	8	2													3	97	28			1	1	56	14
コーヒ-面積 ha			0	0			0	0	0		800	0	0	0	0	213	0	0	0	10	146	0	0	0	0	33	
牧場面積 ha		170	163	49	31	31	900	281	448	1,052	305	637	370	85	3,364	259	789	411	119	3,772	1,048	887	898	170	2,800	1,737	188

トマトの年次別栽培面積と生産量

第17表

年 度	イ グ ア ス			チ ャ ベ ス			フ ラ ム			ア マ ン バ イ			合 計		
	栽培戸数	栽培面積 (ha)	生産量 (ton)	栽培戸数	栽培面積 (ha)	生産量 (ton)	栽培戸数	栽培面積 (ha)	生産量 (ton)	栽培戸数	栽培面積 (ha)	生産量 (ton)	栽培戸数	栽培面積 (ha)	生産量 (ton)
1976~1977	57	55.2	1,597	2	2.0	25	2	2.2	69	16	17.1	247	77	76.5	1,938
1977~1978	56	47.1	1,295	6	3.6	43	3	3.6	62	12	12.8	357	77	66.3	1,757
1978~1979	53	57.3	1,218	4	2.7	61	3	2.2	41	14	14.6	322	74	76.8	1,542
1979~1980	72	71.4	2,264	2	2.0	30	1	1.0	15	15	17.7	424	90	92.1	2,733
1980~1981	76	96.4	3,607	2	1.6	25	-	-	-	16	19.4	226	94	117.4	3,858
1981~1982	74	96.6	4,113	6	2.5	32	-	-	-	22	27.9	204	102	100.0	4,349
1982~1983	70	72.0	3,454	1	0.5	3	1	2.0	20	18	19.2	312	90	93.7	3,789
1983~1984	70	58.9	2,326	5	2.8	29	2	2.0	15	14	14.4	215	91	78.1	2,585
1984~1985	70	60.8	2,277	3	3.0	16	1	1.5	19	9	18.8	130	83	84.1	2,442
1985~1986	58	56.0	2,604	2	1.1	13	1	1.0	5	11	13.8	173	72	71.9	2,795
1986~1987	45	47.1	2,301	-	-	-	-	-	-	15	8.8	229	60	56.0	2,530

日系人植地における油桐の生産面積の推移

第18表

年 度	調査戸数/農家戸数				生産者戸数				栽培面積 (Ha)				Ha/戸			
	ヒラボ	フラム	チャバス	計	ヒラボ	フラム	チャバス	計	ヒラボ	フラム	チャバス	計	ヒラボ	フラム	チャバス	平均
昭和 37	288				215	247	83	545	1,069	1,814	664	3,547	4.97	7.34	8.00	6.51
38	301				281	258	92	631	2,269	2,859	912	6,040	8.07	11.08	9.91	9.57
39	300	300	120	720	290	263	95	648	3,395	3,312	1,076	7,783	11.71	12.59	11.32	12.01
40	310	285	120	715	305	264	95	664	3,886	3,644	1,196	8,726	12.74	13.80	12.59	13.14
41	320	280	110	710	305	260	90	665	4,200	3,800	1,200	9,200	13.77	16.75	13.33	13.83
42	330	275	90	695	290	260	85	635	4,900	3,900	1,150	9,950	16.90	15.10	13.53	15.67
43	335	273	85	693	280	255	80	615	5,600	4,000	1,100	10,700	20	15.68	13.75	17.40
44	335	280	73	688	275	230	70	575	6,325	3,900	1,050	8,550	20	12.96	15.00	14.87
45	284	207/259	71/81	488/624	220	180	66	466	5,060	3,750	1,037	9,847	23	20.83	15.71	21.13
46	225/291	215/220	70/72	510/583	200	160	66	426	4,200	3,000	1,100	8,300	21	18.75	16.67	19.48
47	281/284	215/219	62/71	508/574	170	122	45	337	2,500	1,500	600	4,600	14.71	12.30	13.33	13.65
48	219/311	200/214	54/54	473/579	150	45	32	227	2,000	1,200	500	3,700	13.33	26.67	15.63	16.30
49	230/311	201/214	55/55	486/580	120	42	30	192	1,800	1,000	450	3,250	15.00	23.81	15.00	16.93
50	223/263	187/207	48/52	458/522	110	42	30	182	1,500	900	270	2,670	13.64	21.43	9.00	14.67
51	213/243	185/208	47/52	445/503	103	38	32	173	1,100	600	240	1,940	10.68	15.79	7.50	11.21
52	207/229	178/182	36/43	421/454	100	38	20	158	1,100	525	178	1,803	11.00	13.82	8.90	11.41
53	226/259	169/169	37/43	432/471	90	38	20	148	1,100	400	178	1,678	12.22	10.53	8.90	11.34
54	221/256	149/158	36/42	406/456	75	30	20	125	1,000	360	185	1,545	13.33	12.00	9.25	12.36
55	239/255	149/153	35/40	423/448	73	27	16	116	963	350	150	1,463	13.19	12.96	9.98	12.61
56	220/250	137/152	35/39	392/441	65	25	14	104	850	350	145	1,345	13.08	14.00	10.36	12.93
57	228/241	141/149	32/37	401/427	65	20	15	100	800	325	147	1,272	12.31	16.25	9.80	12.72
58	218/241	130/149	32/37	380/427	62	20	14	96	949	330	120	1,397	15.24	16.50	8.58	14.55
59	219/241	129/149	32/37	380/427	64	20	10	94	820	330	96	1,246	12.81	16.50	9.60	13.25
60	216/241	126/139	32/34	374/414	70	20	10	100	779	300	55	1,134	11.29	15.00	5.50	11.34
61	203/	125/	33/	361/	-	-	-	-	563	226	44	828				
62																

# 大豆の年次別栽培面積と生産量

第19表 - 1

年度	項目	ヒラボ	フラム	チャベス	イグアズ	アマンバイ	合計	備考
1968/ 1969	栽培戸数/総戸数	-	-	-	-	-	-	-
	栽培戸数%							
	栽培面積 (ha)							
	生産量 (tn)							
	kg/ha ha/戸							
1969/ 1970	栽培戸数/総戸数	176/210	200/207	49/71	30/108	59/86	514/682	
	栽培戸数%	83.8	96.8	69.0	27.8	68.6	75.4	
	栽培面積 (ha)	5,000	5,300	-	340	420		
	生産量 (tn)	7,000	7,200	-	380	400		
	kg/ha ha/戸	1,400 28.4	1,358 26.5	-	1,118 11.3	952 7.1		
1970/ 1971	栽培戸数/総戸数	214/225	209/215	55/70	40/106	41/71	559/687	
	栽培戸数%	95.1	97.2	78.6	37.7	57.7	81.4	
	栽培面積 (ha)	5,600	3,840	600	530	250	10,820	
	生産量 (tn)	7,981	8,997	1,161	705	394	17,218	
	kg/ha ha/戸	1,422 26.2	1,822 18.4	1,935 10.9	1,330 13.3	1,578 6.1	1,591 19.4	
1971/ 1972	栽培戸数/総戸数	201/231	203/215	47/62	35/98	39/70	525/676	
	栽培戸数%	87.0	94.4	75.8	35.7	55.7	77.7	
	栽培面積 (ha)	4,139	4,940	642	311	173	10,205	
	生産量 (tn)	5,708	6,777	1,082	451	318	14,336	
	kg/ha ha/戸	1,379 20.6	1,372 24.3	1,685 13.7	1,450 8.0	1,838 4.4	1,405 19.4	平均 ビ 1,463 Kg/ha フ 1,641 " チ 1,698 " イ 1,476 " ア 1,200 " 計 1,552 "
1972/ 1973	栽培戸数/総戸数	207/219	182/200	48/54	32/100	35/63	504/636	
	栽培戸数%	94.5	91.0	88.9	32.0	55.6	79.2	
	栽培面積 (ha)	5,770	4,750	854	384	135	11,873	
	生産量 (tn)	9,163	8,155	1,573	600	245	19,736	
	kg/ha ha/戸	1,588 27.9	1,718 26.1	1,842 17.8	1,648 11.4	1,815 3.9	1,662 23.6	
1973/ 1974	栽培戸数/総戸数	217/230	193/201	45/55	36/109	30/62		
	栽培戸数%							
	栽培面積 (ha)							
	生産量 (tn)	(11,073)	(9,033)	(1,626)	(523)	(547)		(販売量)
	kg/ha ha/戸							
1974/ 1975	栽培戸数/総戸数	213/223	159/187	43/48	54/110	24/60		
	栽培戸数%		8,847	1,345				
	栽培面積 (ha)					204		
	生産量 (tn)	(16,725)	(12,542)	(2,688)	(1,210)	(1,084)		(販売量)
	kg/ha ha/戸							
1975/ 1976	栽培戸数/総戸数	205/213	170/185	37/47	67/116	36/52	509/613	
	栽培戸数%	95.3	93.5	91.5	46.6	69.2	83.0	
	栽培面積 (ha)	8,206	7,357	1,632	1,040	318	18,553	
	生産量 (tn)	8,712	7,750	3,184	1,605	672	22,013	
	kg/ha ha/戸	1,062 40.0	1,053 43.3	1,951 44.1	1,630 15.5	2,113 8.8	1,186 36.4	栽培戸数は不確実
1976/ 1977	栽培戸数/総戸数	203/207	173/178	34/36	69/125	30/52	509/598	
	栽培戸数%	98.1	97.2	94.4	55.2	57.7	85.1	
	栽培面積 (ha)	10,784	8,092	1,462	1,498	575	22,381	
	生産量 (tn)	22,407	15,772	2,559	2,524	1,063	44,325	
	kg/ha ha/戸	2,082 53.0	1,951 46.7	1,750 43.0	1,685 21.7	1,849 19.2	1,980 44.0	平均 ビ 1,515 Kg/ha フ 1,465 " チ 1,746 " イ 1,477 " ア 2,006 " 計 1,520 "
1977/ 1978	栽培戸数/総戸数	221/228	162/169	32/37	71/117	29/49	515/598	
	栽培戸数%	97.8	95.9	86.5	60.7	59.2	86.1	
	栽培面積 (ha)	11,763	8,688	2,080	2,196	651	25,358	
	生産量 (tn)	16,569	12,044	3,199	2,310	1,341	35,347	
	kg/ha ha/戸	1,400 53.2	1,390 53.5	1,537 65.0	1,052 30.9	2,060 22.4	1,394 49.2	



# 大豆の年次別栽培面積と生産量

第19表 - 2

年 度	項 目	ヒヨホ	フラム	チャバス	イゾアス	アマンバイ	合 計	備 考
1978/ 1979	栽培戸数/総戸数	214/221	145/149	32/38	76/132	29/46	496/584	
	栽培戸数%	96.8	97.3	88.9	57.6	63.0	84.9	
	栽培面積 (ha)	12,508	8,688	2,311	2,732	818	27,055	
	生産量 (tn)	18,975	12,011	4,148	4,119	1,358	40,611	
	kg/ha	1,517	1,382	1,795	1,508	1,660	1,501	
	ha/戸	58.4	59.9	72.2	35.9	28.2	54.5	
1979/ 1980	栽培戸数/総戸数	228/239	135/149	32/35	56/128	28/46	479/595	
	栽培戸数%	95.4	91.8	91.4	43.8	60.9	80.5	
	栽培面積 (ha)	13,253	9,321	2,274	2,583	945	28,375.5	
	生産量 (tn)	29,452	19,205	4,885	4,813	1,993	60,328	
	kg/ha	2,222	2,060	2,139	1,863	2,109	2,126	
	ha/戸	58.1	69.0	71.0	46.1	33.8	59.2	
1980/ 1981	栽培戸数/総戸数	217/232	125/137	32/35	58/127	33/54	465/585	
	栽培戸数%	93.5	91.2	91.4	45.7	61.1	79.5	
	栽培面積 (ha)	13,320	8,743	2,248	2,353	797	27,461	
	生産量 (tn)	27,204	17,038	4,542	4,814	1,650	55,248	
	kg/ha	2,042	1,949	2,020	2,046	2,070	2,012	ビ 1,927 Kg/ha フ 1,636 "
	ha/戸	61.4	69.9	70.3	40.6	24.2	59.1	チ 1,922 "
1981/ 1982	栽培戸数/総戸数	222/228	129/141	31/32	51/121	29/51	462/573	
	栽培戸数%	97.4	91.5	96.9	42.1	56.9	80.6	
	栽培面積 (ha)	14,185	9,100	2,283	2,361	1,405	29,334	
	生産量 (tn)	29,454	14,867	4,315	4,744	2,605	55,785	イ 1,804 "
	kg/ha	2,076	1,618	1,890	2,009	1,854	1,902	ア 1,748 "
	ha/戸	63.9	70.5	73.6	46.3	48.4	63.5	平均 1,815 "
1982/ 1983	栽培戸数/総戸数	206/218	123/130	31/32	38/121	32/52	430/553	
	栽培戸数%	94.5	94.6	98.9	31.4	61.5	77.8	
	栽培面積 (ha)	15,132	10,452	2,559	2,356	1,249	31,748	
	生産量 (tn)	26,872	12,231	4,514	3,752	1,309	48,678	
	kg/ha	1,776	1,170	1,764	1,593	1,048	1,533	
	ha/戸	73.5	85.0	82.5	62.0	39.0	73.8	
1983/ 1984	栽培戸数/総戸数	209/219	121/129	31/32	41/126	30/50	432/556	
	栽培戸数%	95.4	93.8	96.9	32.5	60.0	77.7	
	栽培面積 (ha)	15,140	8,990	2,800	2,251	1,103	30,284	
	生産量 (tn)	32,970	17,030	4,470	5,885	1,832	61,967	
	kg/ha	2,178	1,894	1,598	2,517	1,661	2,046	
	ha/戸	72.4	72.3	90.3	54.9	36.8	70.1	
1984/ 1985	栽培戸数/総戸数	210/216	118/126	32/32	39/117	30/49	429/540	
	栽培戸数%	97.2	93.7	100.0	33.3	61.2	79.4	
	栽培面積 (ha)	16,769	9,561	3,060	24,770	1,231	33,098	
	生産量 (tn)	39,520	20,770	6,481	5,975	2,391	73,881	
	kg/ha	2,359	2,172	2,118	2,412	1,942	2,232	ビ 2,154 Kg/ha フ 1,912 "
	ha/戸	79.9	81.0	95.6	63.5	41.0	77.2	チ 1,753 "
1985/ 1986	栽培戸数/総戸数	211/223	113/125	32/33	36/114	28/48	420/543	
	栽培戸数%	94.6	90.4	97.0	31.6	58.3	77.3	
	栽培面積 (ha)	16,343.5	9,280.0	3,194.5	2,449	1,332.5	32,589.5	
	生産量 (tn)	23,108	12,309	3,246	5,529	2,371	46,563	イ 2,529 "
	kg/ha	1,414	1,326	1,016	2,258	1,792	1,429	ア 1,834 "
	ha/戸	77.5	82.1	99.8	68.0	47.2	77.6	平均 2,054 "
1986/ 1987	栽培戸数/総戸数	213/219	114/120	31/32	36/108	29/46	423/525	
	栽培戸数%	97.3	95.0	93.9	33.3	63.0	80.6	
	栽培面積 (ha)	18,560	10,811	3,139	2,954	1,346	36,830	
	生産量 (tn)	49,572	24,378	7,158	8,652	2,613	92,373	
	kg/ha	2,668	2,255	2,280	2,929	1,941	2,508	
	ha/戸	87.2	94.8	101.3	82.1	46.4	87.1	

# 小麦の年次別栽培面積と生産量

第20表 - 1

年度	項目	ピラホ	フラム	チャバス	イグアス	アマンバイ	合計	備考
1969	栽培戸数/総戸数	-	-	-	-	-	-	-
	栽培戸数%	-	-	-	-	-	-	-
	栽培面積 (ha)	-	-	-	-	-	-	-
	生産量 (tn)	-	-	-	-	-	-	-
	kg/ha ha/戸	-	-	-	-	-	-	-
1970	栽培戸数/総戸数	/225	-	-	-	-	-	-
	栽培戸数%	-	-	-	-	-	-	-
	栽培面積 (ha)	-	-	-	-	-	-	-
	生産量 (tn)	-	-	-	-	-	-	-
	kg/ha ha/戸	-	-	-	-	-	-	-
1971	栽培戸数/総戸数	-	22/215	-	-	-	-	-
	栽培戸数%	-	-	-	-	-	-	-
	栽培面積 (ha)	-	187	-	-	-	-	-
	生産量 (tn)	-	188	-	-	-	-	-
	kg/ha ha/戸	-	-	-	-	-	-	-
1972	栽培戸数/総戸数	-	30/200	-	-	-	-	-
	栽培戸数%	-	-	-	-	-	-	-
	栽培面積 (ha)	-	(266) 販売	60	-	-	-	-
	生産量 (tn)	-	-	-	-	-	-	-
	kg/ha ha/戸	-	-	-	-	-	-	-
1973	栽培戸数/総戸数	-	37/201	-	7/55	-	-	-
	栽培戸数%	-	-	-	-	-	-	-
	栽培面積 (ha)	-	-	-	-	-	-	-
	生産量 (tn)	69	663	193	-	-	425	-
	kg/ha ha/戸	-	-	-	-	-	-	-
1974	栽培戸数/総戸数	-	43/201	-	-	-	-	-
	栽培戸数%	-	-	-	-	-	-	-
	栽培面積 (ha)	-	825	526	-	-	-	-
	生産量 (tn)	446	1,309	816	44	-	2,615	-
	kg/ha ha/戸	-	-	-	-	-	-	-
1975	栽培戸数/総戸数	42/213	98/185	25/45	9/116	2/52	176/613	-
	栽培戸数%	19.7	53.0	53.2	7.8	3.8	28.7	-
	栽培面積 (ha)	1,036	1,484	993	250	27	3,790	-
	生産量 (tn)	797	1,017	714	63	30	2,621	-
	kg/ha ha/戸	769 24.7	685 15.1	719 39.7	252 27.8	1,111 13.5	692 21.5	-
1976	栽培戸数/総戸数	41/207	105/178	25/30	5/125	0/52	176/598	-
	栽培戸数%	19.8	59.0	89.4	4.0	-	29.4	-
	栽培面積 (ha)	1,267	2,405	849	64	-	4,585	-
	生産量 (tn)	1,172	2,511	809	46	-	4,538	-
	kg/ha ha/戸	925 30.9	1,044 22.9	953 34.0	719 12.8	-	900 28.1	-
1977	栽培戸数/総戸数	56/228	102/169	28/37	4/117	3/49	193/598	平均
	栽培戸数%	24.8	60.4	75.9	3.4	6.1	32.3	ピ = 671kg/ha
	栽培面積 (ha)	1,700	2,829	1,456	59	20	6,064	フ = 942 "
	生産量 (tn)	1,333	2,494	1,730	38	20	5,615	チ = 818 "
	kg/ha ha/戸	784 30.4	881 27.7	1,188 52.0	644 14.8	1,000 6.7	926 31.4	-
1978	栽培戸数/総戸数	82/221	105/149	26/36	0/132	213/584	-	-
	栽培戸数%	37.1	70.5	72.2	-	-	36.5	-
	栽培面積 (ha)	2,822	4,105	1,556	-	-	8,283	-
	生産量 (tn)	2,968	4,759	2,129	-	-	9,856	-
	kg/ha ha/戸	1,132 32.0	1,159 39.1	1,368 59.8	-	-	1,190	-

# 小麦の年次別栽培面積と生産量

第20表 - 2

年度	項目	ビロホ	フラム	チャバス	イグアス	アマンバイ	合計	備考
1979	栽培戸数/総戸数	113/239	116/149	24/35	0/128	0/46	253/597	
	栽培戸数%	47.3	77.9	68.6	0	0	42.4	
	栽培面積 (ha)	4,088	5,034	1,856	-	-	11,248	
	生産量 (tn)	5,344	8,418	2,595	-	-	16,357	
	kg/ha	1,037	1,587	1,398	-	-	1,454	
	ha/戸	36.2	45.7	77.3	-	-	44.5	
1980	栽培戸数/総戸数	91/232	116/137	26/35	0/127	1/54	234/585	
	栽培戸数%	39.2	84.7	74.3	-	1.9	40.0	
	栽培面積 (ha)	4,690	6,895	2,027	-	28	13,640	
	生産量 (tn)	(3,520)	9,289	2,993	-	48	15,850	
	kg/ha	(751)	1,347	1,477	-	1,714	1,162	
	ha/戸	51.5	59.4	78.0	-	28.0	58.3	
1981	栽培戸数/総戸数	116/228	118/141	26/32	11/121	0/51	271/573	
	栽培戸数%	50.9	83.7	81.3	9.1	-	47.3	
	栽培面積 (ha)	4,982	7,463	2,185	388	-	15,016	
	生産量 (tn)	6,511	9,960	3,464	189	-	20,154	
	kg/ha	1,313	1,335	1,595	490	-	1,342	
	ha/戸	42.9	63.2	84.0	35.1	0	55.4	平均 ビ=1,192kg/ha フ=1,487" チ=1,449"
1982	栽培戸数/総戸数	148/218	115/130	29/32	22/121	13/52	327/553	
	栽培戸数%	67.9	88.5	90.6	18.2	25.0	59.1	
	栽培面積 (ha)	7,721	8,621	2,584	1,169	253	20,348	
	生産量 (tn)	8,559	11,689	3,198	1,956	345	25,747	
	kg/ha	1,109	1,356	1,238	1,673	1,364	1,265	
	ha/戸	52.2	75.0	89.1	53.1	10.5	62.2	
1983	栽培戸数/総戸数	155/219	110/129	30/32	24/126	21/50	340/556	
	栽培戸数%	70.8	85.3	93.8	19.0	42.0	61.2	
	栽培面積 (ha)	8,689	8,259	2,645	963	350	20,906	
	生産量 (tn)	15,197	14,933	4,090	1,239	407	35,866	
	kg/ha	1,749	1,808	1,546	1,287	1,163	1,716	
	ha/戸	56.1	75.1	88.2	40.1	16.7	61.5	
1984	栽培戸数/総戸数	153/216	114/128	31/32	23/117	10/49	331/540	
	栽培戸数%	70.8	90.5	96.9	19.7	20.4	61.3	
	栽培面積 (ha)	9,210	8,998	3,164	1,315	216	22,903	
	生産量 (tn)	12,665	17,487	6,357	602	93	37,204	
	kg/ha	1,375	1,943	2,009	458	431	1,624	
	ha/戸	60.2	78.7	102.1	57.2	21.6	69.2	
1985	栽培戸数/総戸数	175/223	112/125	32/33	24/114	8/48	351/543	
	栽培戸数%	78.5	89.6	97.0	21.1	16.7	64.6	
	栽培面積 (ha)	10,714	9,099	3,598	1,632	152	25,195	
	生産量 (tn)	18,041	15,155	4,904	3,036	228	41,414	
	kg/ha	1,684	1,666	1,363	1,891	1,500	1,644	
	ha/戸	61.2	81.2	112.4	68.0	19.0	71.8	平均 ビ=1,640kg/ha フ=1,892" チ=1,717" イ=1,363" ア=1,328"
1986	栽培戸数/総戸数	163/219	109/120	32/32	27/108	10/46	341/525	
	栽培戸数%	74.4	90.8	100.0	25.0	21.7	65.0	
	栽培面積 (ha)	12,945	9,721	3,586	2,046	341	28,639	
	生産量 (tn)	21,106	20,094	6,380	3,586	548	54,694	
	kg/ha	1,662	2,067	1,773	1,740	1,607	1,910	
	ha/戸	79.4	89.2	112.1	75.4	34.1	84.0	

第21表 (主要地域のみに)

区分	地区	項目	調査年度												
			1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986		
肉	イグアス	肉牛飼養戸数 / 総戸数	36/116 (31.0)	34/125 (27.2)	29/117 (24.8)	32/132 (24.2)	27/128 (21.1)	21/127 (16.5)	21/121 (17.4)	15/121 (12.4)	19/126 (15.1)	27/117 (23.1)	25/114 (21.9)		
		生産額	11,099	19,686	20,067	21,311	19,907	17,193	14,577	19,274	38,069	43,272	65,354		
		農業総生産額 / 農業総生産額	6.9	8.4	7.5	5.9	4.3	3.4	3.2	3.9	4.3	4.8	4.4		
		%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
牛	アマンハイ	肉牛飼養戸数 / 総戸数	-	-	-	-	-	-	-	-	7/50 (14.0)	7/49 (14.3)	6/48 (12.5)		
		生産額	-	-	-	-	-	-	-	-	15,924	28,017	15,724		
		農業総生産額 / 農業総生産額	-	-	-	-	-	-	-	-	4.6	6.5	3.0		
		%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
全	全国	肉牛飼養戸数 / 総戸数	15047/ 1469472 (1.02)	23698/ 1495882 (1.58)	23054/ 1452268 (1.59)	24485/ 1894015 (1.44)	23199/ 2125375 (1.1)	21041/ 2393997 (0.9)	19786/ 2581130 (0.8)	30861/ 2709823 (1.1)	67120/ 6125865 (1.1)	85727/ 6836133 (1.2)	95118/ 7790277 (1.2)		
		生産額	73/613 (11.9)	71/598 (11.9)	56/598 (9.4)	59/584 (10.1)	52/597 (8.7)	50/585 (8.5)	48/573 (8.4)	39/553 (7.1)	65/556 (11.7)	63/540 (11.7)	65/543 (12.0)		
		農業総生産額 / 農業総生産額	27.2	24.3	24.3	23.6	23.4	15.2	17.8	15.9	14.1	19.0	15.6		
		%	20.7	20.0	27.4	22.0	20.3	18.1	16.5	14.0	13.5	14.5	14.0		
豚	イグアス	豚飼養戸数 / 総戸数	24/116 (20.7)	25/125 (20.0)	32/117 (27.4)	29/132 (22.0)	26/128 (20.3)	23/127 (18.1)	20/121 (16.5)	17/121 (14.0)	17/126 (13.5)	17/117 (14.5)	16/114 (14.0)		
		生産額	44,626	56,947	95,516	84,961	106,455	73,508	83,816	77,563	120,731	170,766	231,035		
		農業総生産額 / 農業総生産額	27.2	24.3	36.3	23.6	23.4	15.2	17.8	15.9	14.1	19.0	15.6		
		%	13.5	15.4	16.3	21.7	17.4	13.0	13.7	13.5	12.0	12.2	10.4		
豚	アマンハイ	豚飼養戸数 / 総戸数	7/52 (13.5)	8/52 (15.4)	8/49 (16.3)	10/46 (21.7)	8/46 (17.4)	7/54 (13.0)	7/51 (13.7)	7/52 (13.5)	6/50 (12.0)	6/49 (12.2)	5/48 (10.4)		
		生産額	42,379	52,513	60,216	96,718	98,959	102,787	107,543	114,352	133,746	197,470	134,601		
		農業総生産額 / 農業総生産額	47.7	33.4	43.2	48.8	51.0	47.8	46.2	54.5	38.7	45.7	25.7		
		%	10.8	7.9	11.5	11.7	10.9	8.9	7.5	7.3	4.4	5.6	6.5		
豚	全国	豚飼養戸数 / 総戸数	158473/ 1469472 (10.8)	118220/ 1495882 (7.9)	167346/ 1452268 (11.5)	198715/ 1699015 (11.7)	232629/ 2125375 (10.9)	213999/ 2393997 (8.9)	193737/ 2581130 (7.5)	198185/ 2709823 (7.3)	270495/ 6125865 (4.4)	389528/ 6836133 (5.6)	504627/ 7790277 (6.5)		
		生産額	32/613 (5.2)	34/598 (5.7)	43/598 (7.2)	41/584 (7.0)	29/597 (4.9)	35/585 (6.0)	35/573 (6.1)	36/553 (6.5)	35/556 (6.3)	43/540 (8.0)	47/543 (8.7)		
		農業総生産額 / 農業総生産額	50.0	47.7	50.0	51.0	47.8	46.2	54.5	38.7	45.7	25.7			
		%	34.5	24.8	23.9	19.7	17.2	20.5	18.2	14.0	12.7	9.4	9.6		
豚	イグアス	豚飼養戸数 / 総戸数	40/116 (34.5)	31/125 (24.8)	28/117 (23.9)	26/132 (19.7)	22/128 (17.2)	26/127 (20.5)	22/121 (18.2)	17/121 (14.0)	16/126 (12.7)	11/117 (9.4)	11/114 (9.6)		
		生産額	6,172	5,718	6,892	8,742	6,612	6,915	16,336	13,777	23,407	24,484	18,544		
		農業総生産額 / 農業総生産額	3.8	2.4	2.6	2.3	1.4	1.4	3.6	2.8	2.7	2.7	1.3		
		%	3.8	2.4	2.6	2.3	1.4	1.4	3.6	2.8	2.7	2.7	1.3		

養蚕年次別地区別生産推移表

年	1970					1971					1972						
	項目	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg
1970	地区																
	ヒラホ	44	152	1,226	32,947	26.9	71	247	2,091	61,563	29.4	68	342	2,678	79,699	29.8	
	フラム	45	148	1,293	34,675	26.8	75	282	2,230	68,000	30.5	89	440	3,452	97,976	28.4	
	イグアス	1	23	2	57	28.3	17	69	201	5,573	27.7	25	121	535	10,976	20.5	
	ラ・コルメナ アマンバイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	15	1	33	33.5	
日系人計	90	363	2,521	67,679	26.9	163	598	4,522	135,136	29.9	183	918	6,863	188,684	28.3		
八国人計	13	85	82	2,106	25.8	69	253	673	15,623	23.2	227	613	2,114	42,703	20.2		
合	103	448	2,603	69,784	26.8	232	851	5,195	150,759	29.0	410	1,531	8,780	231,387	26.4		
年	1973					1974					1975						
	項目	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg
1973	地区																
	ヒラホ	79	391	3,252	93,229	28.6	67	310	1,200	64,500	29.4	69	364	4,867	93,000	30.0	
	フラム	97	508	4,428	132,023	29.8	79	427	3,683	103,890	28.4	65	438	3,100	90,000	24.5	
	イグアス	18	146	693	20,191	29.1	11	110	459	10,827	23.6	15	134	600	17,000	27.5	
	ラ・コルメナ アマンバイ	10	91	124	3,831	30.9	13	100	326	8,783	26.7	14	115	512	15,000	30.0	
日系人計	204	1,136	8,507	249,274	29.5	185	1,067	7,863	223,000	28.4	178	1,051	8,942	249,525	29.5		
八国人計	330	995	4,545	104,334	23.0	233	697	2,188	66,856	30.6	193	838	3,843	32,585	23.6		
合	534	2,131	13,052	353,608	27.1	418	1,764	10,056	289,856	28.8	371	1,909	12,785	282,110	27.3		
年	1977					1978					1979						
	項目	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg
1977	地区																
	ヒラホ	36	186	1,178	34,982	28.9	37	136	1,057	35,259	33.4	36	155	1,150	37,718	32.8	
	フラム	24	132	1,007	30,435	30.2	24	92	1,004	33,405	33.3	21	852	1,062	32,721	30.8	
	イグアス	9	63	150	4,571	30.5	10	47	240	7,216	30.1	13	53	344	10,921	31.7	
	ラ・コルメナ アマンバイ	9	-	337	9,059	26.9	10	-	362	8,313	22.9	9	-	352	11,113	31.6	
日系人計	94	392	3,618	109,592	30.2	95	376	3,794	117,193	30.9	91	1,161	3,955	121,975	30.8		
八国人計	180	582	2,883	61,996	21.5	243	637	3,000	73,919	24.6	379	740	4,658	134,065	28.8		
合	270	974	6,501	171,588	26.4	338	1,013	6,791	191,112	28.1	470	1,901	8,613	256,040	29.7		
年	1980					1981					1982						
	項目	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg	戸数	桑園 ha	生産量 kg	箱等 kg
1980	地区																
	ヒラホ	36	143	1,150	37,717	32.8	38	139	1,136	33,194	29.2	35	114	878	26,000	29.6	
	フラム	21	111	1,062	32,721	30.8	21	76	817	21,684	26.5	15	70	803	22,000	27.4	
	イグアス	13	38	344	10,921	31.7	13	38	768	18,042	23.5	13	36	599	15,500	25.9	
	ラ・コルメナ アマンバイ	9	-	352	11,113	31.6	6	-	189	4,190	22.2	3	-	112	2,500	22.3	
日系人計	13	83	1,047	43,506	41.5	10	65	635	13,582	21.4	8	86	496	10,500	21.2		
八国人計	92	375	3,995	135,978	34.4	88	518	3,545	90,692	25.6	74	-	2,888	76,500	26.5		
合	378	1,766	4,657	120,062	25.8	411	-	10,690	247,788	23.2	289	-	7,400	193,500	26.1		
合	470	2,141	8,612	256,040	29.7	499	2,100	14,205	388,480	23.8	363	-	10,288	270,000	26.2		



## 編集後記

パラグアイにおけるJICAの直営農試、この25年を編集しつゝ回顧する時、その時代毎の背景とニーズを踏まえ、少ない陣容と予算、そして、試験場とは言えないほど貧弱な施設、器材で、当時の担当者はそれぞれが良く頑張ってきたという感慨を禁じ得ない。

そして、それを結果論的にみると、その努力が無意義であったものも多数あるが、試行錯誤は新規開拓入植地での宿命であり、それを乗り越えるところに旧指導農場担当者の使命があったと理解している。

当農試の歴史中、前半期は、作物栽培の技術的研究よりも、むしろ、どの作目が入植地に適するか、という適作目探索と、開拓地における経営と生活指導が、まず先決であったからである。

そして後半期には、大半の入植者が経営作目における試行錯誤の時代を抜け出し、自身の経営方針を見出すに至ったが、試験場本来の焦点の定まった試験研究業務は、実にこの後半期から開始されたとも言えるわけである。

さて、当農試25年の節目を機会に、この歩みを小史として残そうという企画は丁度25年目の頃に発案され、発行予定日は1988年3月末を目標として設定した。しかし、業務の都合で本格的にその作業に取り掛かったのは、1988年の3月に入ってからであり、しかも、ルーティングの業務を処理しながらの作業である為、そのはかどりは遅々としたものであった。

作業が三分の1にも満たない4月下旬には、発案者たる栄田場長帰国という編集部としては予期せざる事態に直面、少なからず狼狽したが、25年の歩みの総括を新旧二人の場長による連携プレーという趣向で対処した。

25年に及ぶ業務をさかのぼって調査し、そして、それを凝縮して纏めるという作業は、専任でもない限り至難であることは充分に予想したが、やはり予想以上の作業であった。

主として過去の月報、試験成績書、業務実績報告書、農家経済調査集計表、試験成績総括書等を調べ上げ、これを基にしたが、初期の資料が見当たらないこと、あっても様式と報告項目が時代によって一定でなく、必要とする情報が欠落していること等で、難渋した。しかし、業務上これ以上、本小史に時間をさくわけにはいかないこと、また時間をかけたとしても、基になる資料がないので、何れにしても完璧は期し難いと判断し、編集を打ち切った。

従って、時代によってその内容には濃淡、もしくは欠落部分があることはご容赦頂きたい。また多くの方々に追想文をお寄せ頂いたが、紙面の都合上一部削除させて頂いたことも併せ御容赦願うと共に、寄稿に対して心から感謝申し上げます。

当農試は、今こそCETAPARとして一場に集約されているが、かつてはフラム、アルト・パラナ、イグアスの3ヶ所に所在していた。本小史ではこの3農試(旧指導農場)の歴史を個々に纏めてみたかったが、フラム農場の記録が殆んど残されていない為、イグアスとアルト・パラナの2場に限定せざるを得なかったことは、編集部としては一抹の心残りである。

原稿のうちで大型B4紙面で作成した研究成果と概要表等を本小史のA4版に収める為に8/8に縮小せざるを得なかった。

多分に読みづらい点もあるうかと思われるがお許しを乞う。

本史は25年に亘って積み重ねた貴重な資料の整理を目的としたが、これにより一般の方々には当農試の25年に亘る歩みを少しでも理解して頂き、また先輩諸兄には、苦楽共々過ぎ去りし当時を想起して一読して頂ければ執筆、編集者一同これに勝る喜びはない。(C. A.)

1988年11月20日

# 本小史担当者

本小史は下記の職員が担当した。

企画	-----	栄田, 菅原, 遊佐, 青山
執筆	-----	
イグアスの部		
パ国におけるJICA農総試の創設経緯とこの25年	-----	篠崎
年代区分毎の業務概要とその成果	-----	栄田
歴代職員の動き年表	-----	菅原, 関
歴代派遣専門家の動き年表	-----	遊佐
入植地の営農と普及業務概要	-----	塚田
過去の試験研究課題一覧	-----	塚田
同上 (大豆)	-----	関
同上 (小麦)	-----	関, 遊佐
同上 (トウモロコシ)	-----	関
同上 (桑, 養蚕)	-----	関
同上 (新規導入作物)	-----	関
同上 (ステビア)	-----	関
同上 (トマト)	-----	遊佐
同上 (メロン)	-----	遊佐
同上 (多輸入野菜及びその他の野菜)	-----	遊佐
同上 (土壌)	-----	遊佐
同上 (牧草)	-----	塚田, 堀田, 遊佐
同上 (牧野造成)	-----	塚田, 堀田,
同上 (サイレージ)	-----	塚田, 堀田
同上 (牛)	-----	塚田, 堀田
同上 (豚)	-----	塚田, 堀田
南米農業技術者会議	-----	青山
年代区分毎の入植地の動きと主要普及業務	-----	塚田, 堀田, 関
普及課開設後の普及業務	-----	青山
普及成果の概要	-----	遊佐, 塚田, 堀田, 関
研究協力業務	-----	遊佐, 青山
アルト・パラナの部		
歴代職員の動き年表	-----	青山
パ農総試25年の動き年表	-----	青山
入植地の営農と普及業務概要	-----	青山
過去の試験研究課題一覧	-----	青山
試験研究成果の概要	-----	青山
年代区分毎の入植地の動きと主要普及業務	-----	青山
普及成果の概要	-----	青山
写真編	-----	青山
資料編	-----	青山, 園田, 名倉, 関(善寿)
構成・編集	-----	青山, 園田
ワープロ	-----	園田, 関, 名倉, 関(善寿)
推敲・校正	-----	篠崎, 遊佐, 青山, 塚田, 園田, 関



